岩波文庫

1324

直毘靈
玉鉾百首

本居宣長著
村岡典嗣校訂

岩波書店

岩波文庫

1324

直毘靈
玉鉾百首

本居宣長著
村岡典嗣校訂

岩波書店

目次

解說……一五
直毘靈……一五
玉鉾百首……二九
玉鉾百首解……五一
附載　本末歌……二七

解說

直毘靈と玉鉾百首とは、本居宣長の古道の代表作に屬する。直毘靈は卷末の自記によつて、明和八年（四十二歳）の十月九日の筆であることが知られる。併し、當時刊行されたか否かは、——鈴屋翁略年譜や、稿本全集第一册（九〇五頁）所收の「寛政五年マデニ刊行セル著書」に記載あるにも關らず、未だ詳かでない。一般に傳へられたのは、古事記傳一卷の終りに揭げられたものと、後年文政八年に竹村茂雄が出版した單行本とによつてゞある。（明治以後、單獨に又は全集や叢書に收めての出版は、このいづれかの復刻である。）而して後者には、本居大平の序と茂雄の跋とがあつて、出版の由來、殊に大平が茂雄に與へた宣長自筆の淨書本を底本としたよしが記されてゐる。兩者を比較すると、書式に於いて、古事記傳本は註記を本文から引下げて記したのに、竹村本は割註として細書した違ひがあるが、字句については、極めて些細な七八箇所の差がある。例へば竹村本に、「かゝふらぬ國なし」とあり、「古事記」とあるのが（本文庫本一五頁ノ四行）、古事記傳本には、「かゝふらぬ國あらめや」とあるのが（同上一七頁ノ六行、二八頁ノ一三行）、此記とある類ひ、畢竟同文と認めて差支ない程度である。なほかく完成されたものと、明和八年脫稿當時のものとの關係如何は、別に研究せらるべき問題である。けだし古事記傳の最初の

部が、版下の爲に淨書されたのは、天明八年（五十九歳）十月廿三日、更に寫本となつて出來たのは、寛政二年（六十一歳）九月の事で、脫稿後十數年の間に、修正や精錬が加へられたのは、當然とされねばならぬからである。（現に標題さへ、種々變へられたこと、後述の如くである。）併しこの問題は、こゝに吾人の論ずることを得難いところであり、また、本書に於いて、本居の古道說の序論即結論を紹介しようとする見地からしては、必要のないものである。

直毘靈てふ名は、後に負せられたもので、古事記傳の初稿本には、單に「道云事之論」とされた。（されば傳の版本には、「此篇は道といふことの論ひなり。」の割註がある。）次には、眞靈と記されたこともあつた。この名の意味は、竹村本の序に、大平が古事記の伊邪那岐大神の御身滌の段を引いて、「かれ此書は、外國の書學ぶことの傳り來て、世の人漢籍意に相臧自許利相口會て、その禍事に汚たるを祓ひ淸めて、本つ大道に返さしむる敎の書になもある。」といひ、同じく直毘靈の終りに、「如此まで論ふも、道の意にはあらねども、禍津日神のみしわざ見つゝ默止もあらず、神直毘神大直毘神の御靈たばりて、このまがをもて直さむとぞよ。」とある如く、所謂漢心のまがを直すてふことに歸する。玉鉾百首のうちの、「漢心直し給へと大直毘神の直毘をこひのみまつれ」の一首、また參照するに足る。

本居が古道の代表作として、本書に看過することの出來ないのは、本居が親しく本書を講義し

た事實である。卽ち安永三年四十五歲のことで、日記十月十六日の條に、「自今夕、直靈講尺。以二六十之夜爲定日。」とあり十一月卅日の條に、「今夕直靈講竟終。」とある。而して本居の生前死後、本書がしばしば論議の的となつた事實も、注意される。まづ夙く安永九年に、名古屋の儒者市河多門匡が、まがのひれを著して、論難を試みたが、之に對して、本居は直ちに葛花二卷を著して、報いた。これをはじめとして、本居の死後著されたものに、

級長戶風　　文政十三年　　沼田順義
神道蔕障辨　　天保　四年　　山田維則
直日和靈　　天保　四年　　無名氏
直日靈正意解　　天保　九年　　源保之
讀直日靈　　安政　五年　　會澤正志

がある。いづれも儒教、又は佛教の立場からの、本居の說に對する抗議である。直日和靈、直日靈正意解の二著も、名は之を襲ひながら、同樣で、前者は本居の眞毘靈の排儒的言說を荒魂と見て、之に對して神儒一致の寬容的見地から古道を說いたもの。後者は、享和元年、本居が晩年の京都の講苑に列したといふ著者が、佛僧の囑によりて、主佛的見地から、本居の說は佛道を誤解したもので、直日靈の正意はむしろ佛教にあると說いたもの、神道蔕障辨に於ける排佛的言辭に刺戟された作である。これらに對し、特に直日靈を祖述し辯護した著書には、

呵妄書	享和　三年	平田篤胤
道守の標	文政十二年	竹村茂雄
花のしがらみ	天保　九年	菅原定理

等がある。呵妄書は太宰春臺の辨道書を攻撃したもの。道守の標は、茂雄が直毘靈の出版に當つて、附錄としたもの。花のしがらみは、級長戸風に對する反駁である。（序に、備前笠岡の人で、藤井高尚の師であつた小寺清先の、文化十三年の著に、直日の教といふものがあるが、これは在來の神道の立場からの通俗的教訓書で、本居の説とは何等關係がない。）

玉鉾百首解

玉鉾百首は天明六年（五十七歳）既に成り、七年二月刊行された。その後も、諸種の刊行があるが、萬葉假字で記されたのが原の形である。玉鉾はもとより道の枕詞で、「道の事を詠候古風の百首也。」（千家俊信宛宣長書翰に見ゆ。）である。正編百首に阿麻理歌三十二首が添へてある。（鈴屋集中には、卷九の終りに近い一群の如き、これに類するものが多少ある。）玉鉾百首解は、宣長の家學を繼いだ本居大平の著で、寛政八年、四十一歳の九月成稿。當時宣長は六十七歳であつた。その撰述には、もとより關與し、或は指導もしたことは想像し得るところで、現に序文を千家俊信に依頼したよしが、當時の書狀に見える。卽ち、寛政九年六月十九日付のもの（本居宣長稿本全集二ノ一九五頁）に曰く、「一大平玉梓百首解出來申候に付、御序文御願申候段、兼々愚

老へも申候儀に御座候。此度右御序文御草稿御認被遣、致拜見、大平とも致相談、再三相調べ、致添削、大平より先づかりに清書いたし、上候筈に御座候間、其御地に而板下御認、被遣様に奉存候。全體御文宜出來申候而大慶仕候。」と。極めて忠實な宣長の祖述者なる大平が、かゝる事情のもとに著したこの解が、原書の爲に最もよき註釋書であることは疑ひない。なほ宣長が名古屋に於ける有力な門人横井千秋にも、同じ企てがあつた事が、寛政元年四月十六日付の、同人宛宣長の書狀（本居宣長翁書翰集八三頁）に、「玉矛百首御註解之末へ、本末哥をも入れ、是又御注解可被成下旨」、云々、又寛政四年六月廿六日付同樣書狀（同書一二九頁）に「玉矛百首御注、御下書ニ御掛り被成候由、此書はいつれも待兼龍在候義ニ御座候へは、何とそ早く御清書奉待候。」とあり、更に天明八年八月廿九日付の、宣長宛千秋の書狀（稿本全集二ノ四九八）に、「一玉矛百首解、御尋被仰下候趣承知仕候。右は古學ノ弘マリ候に、手近くテ甚宜敷物に奉存候處、大概一首ごとに、追々の御著述物ノ中ノ御言を引出し申候へば、今は册數五六卷にも可相成ほどにいたり申候。夫故大キに延引に相成り申候。此節は、大かたに出來候へば、幸便に先々入御覽可申と奉存候。」とある等によつてわかる。千秋の企ては、大平のよりはるかに先立つて、着手もされ成就もされたらしいが、その結果は、傳つてをらぬ。又大平との關係も明らかでない。

玉鉾百首後、大平が文政五年の詠なる倭心三百首をはじめ、これにならつたものが幾つか現は

れた。百首の解に至つては、大平のほかに、左のものがある。

玉鉾百首俚言解　　明治　九年　　青柳高鞆

一方はまとまつた一編の文詞であり、一方は諸々の觀念や思想を、命題的にのべた短歌であり、それ〳〵樣式を異にするにも拘らず、この二書が、本居の古道の概說の雙璧であることは疑ひない。著作の時代に於いては、直毘靈の脫稿は、本居が古事記の註釋の筆をとつて、その第十段御身滌の條を終つたといふ頃、後者はその後十五年を經、古事記上卷全部の傳を書終へた時である。しかも直毘靈は、少くも現行の相に於いて、本居の古道研究の、單に序論なるのみならず結論として、百首と同樣の地位にあると、大體考へ得る。而してあたかも直毘靈を、百首が注解し、細說してゐる觀があり、相俟つて本居の古道說の眞相を、明示してゐると爲し得る。而してその本旨は、古傳說に於いての、萬世一系の皇室の統治でふわが特殊の國體觀の闡明と、それにもとづいての皇國主義の主張とに外ならず、極めて單純簡明、かつその單純簡明なるところに、意義を存する。されば門人横井千秋が、彼に書贈つた天明五年多の一書狀中にも、「扨また兼々申上候直靈極意之儀、御文面之外別に極意ノ御旨意トテハ無御座候よし、被仰下候趣、兼々直丸へも御咄し御座候御趣、共に承知仕候。いか樣然あるべき御事に而可有御座儀と奉存候。先キに御伺ひ申

上候趣は、全ク私承リ違へ候事と奉存候。」（稿本全集第二ノ四九四頁）とある。而して之とともに、本居の學問思想に存する「古代」の理解と主張とのあまりに出でた儒佛、就中儒教の攻撃や、さま〴〵の素朴な「古代」の再現と、それに對する特殊の信仰と等があり、それらは殊に、儒者側の非難攻撃を招かざるを得なかつた。而して儒者側の說たる、或は儒教の、本國はもとより我國に於いて、文化や道德に貢獻した事實を無視せる本居の排儒說の、過激であり、偏頗であるを言へる、或は古へは簡にして皇統の永久なるを大道であると說きながら、その大道は、畢竟倫常の實現、卽ち儒教の本旨と一致せるにも拘らず、徒らに儒教を斥けるは矛盾であるを言へる、或は本居の古習古風を盲信するの弊を言へる等、一つ一つには、正當なるもの少しとしない。就中會澤が、讀直毘靈の論を以て、最も代表的なりとすべきである。併しながらかゝる非難も、若本居の文獻學とそれに基く古神道の信仰的態度と、更に儒教や佛教を承認し囘包容する、實際的態度とを理解する時には、換言すれば、全體としての本居の理解の前には、概ね解消し、若くは宥和さるべきものであり、決して、本居の古道の、主張の本質的意義を侵すべきものでない。而して所謂本質的意義を爲すものに至つては、實に、直毘靈の本文數十行の文字に於いて、最もよく言表され、同書の註文も、同樣にまた玉鉾百首の各々も、いづれもこの本文を中心として、理解せられねばならぬ。この見地からして、まづ直毘靈の本文を、獨立して讀むの用意が、特に必要

であると思ふ。その本文の主張の要旨が、わが特殊の國體觀とその實現とに、道の第一義をこれ認めた、單純簡明なものであること、前にも一言した如くで、而して儒佛の說く所の如き、それに對して、第二義的なるの故を以て、斥けられたのに過ぎない。かの論者側からの幾多の非難の如はき、本居にとつては、けだし初めからわかつてゐたことで、思ふに今更之を敎へらるべくは、本居は餘りに聰明であつたのである。

終りに、この文庫本のために底本としたものは、直毘靈に於いては竹村本の本文、(但し書式は古事記傳本による。) 玉鉾百首及び解は、それ〳〵原刻本で、別に鈴屋集中の長歌本末の歌を附載した。(橫井千秋がその玉鉾百首の解に、この長歌を併せ註しようとしたことは前にも述べたが、玉鉾百首の刻本にも、之を添へたものがあつた。たは、文化十四年に岩政信比古の著した本末歌解一卷があり、刊行されてゐる。) 而して印刷上の用意としては、變態假名の書換、句讀點の多少の變改のほかは、なるべく原本そのまゝの再現を志した。

昭和十一年七月十日

校訂者しるす

直毘靈

直毘靈

皇大御國は、掛まくも可畏き神御祖天照大御神の、御生坐る大御國にして、萬國に勝れたる所由は、先こゝにいちじるし。國といふ國に、此大御神の大御德かゞふらぬ國あらめや。

大御神、大御手に天つ璽を捧持して、

御代御代に御しるしと傳はり來つる、三種の神寶は是ぞ。

萬千秋の長秋に、吾御子のしろしめさむ國なりと、ことよさし賜へりしまに〳〵、

天津日嗣高御座の、天地の共動かぬことは、既くこゝに定まりつ。

天雲のむかぶすかぎり、谷蓁のさわたるきはみ、皇御孫命の大御食國とさだまりて、天下にはあらぶる神もなく、まつろはぬ人もなく、

いく萬代を經とも、誰しの奴か、大皇に背き奉む。あなかしこ、御代御代の間に、たま〳〵も不伏惡奴もあれば、神代の古事のまに〳〵、大御稜威をかゞやかして、たちまちにうち滅し給ふ物ぞ。

千萬御世の御末の御代まで、天皇命はしも、大御神の御子とまし〳〵て、

御世御世の天皇は、すなはち天照大御神の御子になも大坐ます。故天つ神の御子とも、日の御子ともまをせり。

天つ神の御心を大御心として、

何わざも、己命の御心もてさかしだち賜はずて、たゞ神代の古事のまゝに、おこなひたまひ斉め賜ひて、冥ひおもほす事しあるをりは、御卜事もて、天神の御心を問して物し給ふ。

神代も今もへだてなく、

たゞ天津日嗣の然ましますのみならず、臣連八十伴緒にいたるまで、氏かばねを重みして、子孫の八十續、その家々の職業をうけつがひつゝ、祖神たちに異ならず、只一世の如くにして、神代のまゝに率仕れり。

神ながら安國と、平けく所知看しける大御國になもありければ、

書紀の難波長柄朝廷御巻に、惟神者、謂二隨神道一亦自有神道一也とあるを、よく思ふべし。神道に隨ふとは、天下治め賜ふ御しわざは、たゞ神代より有こしまに〳〵物し賜ひて、いさゝかもさかしらを加へ給ふことなきをいふ。さてしか神代のまに〳〵、大らかに所知看せば、おのづから神の道はたらひて、他にもとむべきことなきを、自有二神道一とはいふなりけり。かれ現御神と大八洲國しろしめすと申すも、其御世々々の天皇の御政、やがて神の御政な

る意なり。萬葉集の哥などに、神隨云々とあるも、同じこゝろぞ、神國と韓人の申せりしも、諾にぞ有ける。

古の大御世には、道といふ言擧もさらになかりき。

故古語に、あしはらの水穗の國は、神ながら言擧せぬ國といへり。

其はたゞ物にゆく道こそ有けれ。

美知とは、古事記に味御路と書る如く、山路野路などの路に、御てふ言を添たるにて、たゞ物にゆく路ぞ。これをおきては、上代に、道といふものはなかりしぞかし。

物のことわりあるべきすべ、萬の教へごとをしも、何の道くれの道といふことは、異國のさだなり。

異國は、天照大御神の御國にあらざるが故に、定まれる主なくして、狹蠅なす神ところを得て、あらぶるによりて、人心あしく、ならはしみだりがはしくして、國をし取つれば、賤しき奴も、たちまちに君ともなれば、上とある人は、下なる人に奪はれじとかまへ、下なるは、上のひまをうかゞひて、うばゝむとはかりて、かたみに仇みつゝ、古より國治まりがたくなも有ける。其が中に、威力あり智り深くて、人をなつけ、人の國を奪ひ取て、又人にうばはるまじき事量をよくして、しばし國をよく治めて、後の法ともなしたる人を、もろこしには聖人とぞ

云なる。たとへば、亂れたる世には、戰にならふゆゑに、おのづから名將おほくいでくるが如く、國の風俗あしくして、治まりがたきを、あながちに治めむとするから、世々にそのすべをさまざま思ひめぐらし、爲ならひたるゆゑに、しかかしこき人どももいできつるなりけり。然るをこの聖人といふものは、神のごとよにすぐれて、おのづからに奇しき德あるものと思ふは、ひがことなり。さて其聖人どもの作りかまへて、定めおきつることをなも、道とはいふなる。かゝれば、からくにゝして道といふ物も、其旨をきはむれば、たゞ人の國をうばはむがためと、人に奪はるまじきかまへとの、二ツにはすぎずなもある。そも〳〵人の國を奪ひ取むとはかるには、よろづに心をくだき、身をくるしめつゝ、善ことのかぎりをして、誅人をなつけたる故に、聖人はまことに善人めきて聞え、又そのつくりおきつる道のさまも、うるはしくよろづにたらひて、めでたくは見ゆめれども、まづ已からその道に背きて、君をほろぼし、國をうばへるものにしあれば、みないつはりにて、まことはよき人にあらず。いともいとも惡き人なりけり。もとよりしか穢惡き心もて作りて、人をあざむく道なるけにや、後人も、うはべこそたふとみしたがひがほにもてなすめれど、まことには一人も守りつとむる、人なければ、國のたすけとなることもなく、其名のみひろごりて、つひに世に行はるゝことなくて、聖人の道は、たゞいたづらに、人をそしる世々の儒者どもの、さへづりぐさとぞなれりける。然るに

儒者の、たゞ六經などいふ書をのみとらへて、彼國をしも、道正しき國ぞと、いひのゝしるは、いたくたがへることなり。かく道といふことを作りて正すは、もと道の正しからぬが故のわざなるを、かへりてたけきことに思ひいふこそをこなれ。そも後人、此道のまゝに行なはゞこそあらめ、さる人は、よゝに一人だに有がたきことは、かの國の世々の史どもを見てもしるき物をや。さて其道といふ物のさまは、いかなるぞといへば、仁義禮讓孝悌忠信などいふ、こちたき名どもを、くさ〴〵作り設て、人をきびしく敎へおもむけむとぞする。さるは後世の法律を、先王の道にそむけりとて、儒者はそしれども、先王の道も、古の法律なるものをや。また易などいふ物をさへ作りて、いともこゝろふかげにいひなして、天地の理をきはめつくしたりと思ふよ。これは、た世人をなつけ治めむための、たばかり事ぞ。そも〳〵天地のことわりはしも、すべて神の御所爲にして、いとも〳〵妙に奇しく、靈しきものにしあれば、さらに人のかぎりある智りもては、測りがたきわざなるを、いかでかよくきはめつくして知ることのあらむ。然るに聖人のいへる言をば、何ごともたゞ理の至極と、信たふとみをるこそいと愚なれ。かくてその聖人どものしわざにならひて、後々の人どもゝ、よろづのことを、己がさとりもておしはかりごとするぞ、神國のくせなる。大御國の物學びせむ人、是をよく心得をりて、ゆめから人の說になまどはされそ。すべて彼國は、事毎にあまりこまかに心を着て、かにかく

に論ひさだむる故に、なべて人の心さかしだち悪くなりて、中々に事をしゝこらかしつゝ、いよゝ國は治まりがたくのみなりゆくめり。されば聖人の道は、國を治むるために作りて、かへりて國を亂すたねともなる物ぞ。すべて何わざも、大らかにして事足ぬることは、さてあるこそよけれ。故皇國の古は、さる言痛き教へも何もなかりしかど、下が下までみだるゝことなく、天下は穏に治まりて、天津日嗣いや遠長に傳はり來坐り。さればかの異國の名にならひていはゞ、是ぞ上もなき優たる大き道にして、實は道あるが故に道てふ言なく、道てふことなけれど、道ありしなりけり。そをことゞくしくいひあぐると、然らぬとのけぢめを思へ。言擧せずとは、あだし國のごと、こちたく言たつることなきを云なり。譬ば才も仁も、すぐれたる人はいひたてぬを、なまゝのわろものぞ、返りていさゝかの事をも、ことゞくしく言あげつゝほこるめる如く、漢國などは、道ともしきゆゑに、かへりて道々しきことをのみ云あへるなり。儒者はこゝをえしらで、皇國をしも、道なしとかろしむるよ。儒者のえしらぬは、蚤に漢を尊き物に思へる心は、なほさも有なむを、此、の物知人さへに、是をえさとらずて、かの道てふことある漢國をうらやみて、强てこゝにも道ありと、あらぬことゞもをいひつゝ爭ふは、たとへば、猿どもの人を見て、毛なきぞとわらふを、人の恥て、おのれも毛はある物をといひて、こまかなるをしひて求出て見せて、あらそふが如し。毛は無きが貴きをもしらぬ、癡人のしわざにあ

らずや。

然るをやゝ降りて、書籍といふ物渡參來て、其を學びよむ事始まりて後、其國のてぶりをならひて、やゝ萬のうへにまじへ用ひられるゝ御代になりてぞ、大御國の古の大御てぶりをば、取別て神道とはなづけられたりける。そはかの外國の道々にまがふがゆゑに、神といひ、又かの名を借りて、こゝにも道とはいふなりけり。

神の道としもいふ所由は、下につばらかにとく。

しかありて御代々々を經るまゝに、いやます〳〵に、その漢國のてぶりをしたひまねぶこと、盛になりもてゆきつゝ、つひに天の下所知看す大御政も、もはら漢様に爲はてゝ、難波の長柄宮、淡海の大津宮のほどに至りて、天の下の御制度も、みな漢になりき。かくて後は、古の御てぶりは、たゞ神事にのみ用ひ賜へり。故後代までも、神事にのみは、皇國のてぶりの、なほのこれることおほきぞかし。

青人草の心までぞ、其意にうつりにける。

天皇尊の大御心を心とせずして、己々がさかしらごころを心とするは、漢意の移れるなり。

さてこそ安けく平けくて有來し御國の、みだりがはしきことといできつゝ、異國にやゝ似たることも、後にはまじりきにけれ。

いともめでたき大御國の道をおきながら、他國のさかしく言痛き意行を、よきことゝして、ならひまねべるから、直く清かりし心も行ひも、みな穢悪くまがりゆきて、後つひには、かの他國のきびしき道ならずては、治まりがたきが如くなれるぞかし。さる後のありさまを見て、聖人の道ならずては、國は治まりがたき物ぞと思ふめるは、しか治まりがたくなりぬるは、もと聖人の道の蔽なることを、えさとらぬなり。古の大御代に、其道をからずて、いとよく治まりしを思へ。

そもく此天地のあひだに、有とある事は、悉皆に神の御心なる中に、凡て此世中の事は、春秋のゆきかはり、雨ふり風ふくたぐひ、又國のうへ人のうへの、吉凶き萬事、みなことごとに神の御所爲なり。さて神には、善もあり悪きも有て、所行もそれにしたがふなれば、大かた尋常のことわりを以ては、測りがたきわざなりかし。然るを世人、かしこきもおろかなるもおしなべて、外國の道々の説にのみ惑ひはてゝ、此意をえしらず、皇國の學問する人などは、古書を見て、必知べきわざなるを、さる人どもだに、えわきまへ知ざるは、いかにぞや。抑吉凶き萬の事を、あだし國にて、佛の道には因果とし、漢の道々には天命といひて、天のなすわざと思へり。これらみなひがことなり。そが中に佛道説は、多く世の學者の、よく辨へつることなれば、今いはず。漢國の天命の説は、かしこき人もみな惑ひて、いま

だひがことなることをさとれる人なければ、今これを論ひさとさむ。抑天命といふことは、彼國にて古に、君を滅し國を奪ひし聖人の、己が罪をのがれむために、かまへ出たる託言なり。まことには、天地は心ある物にあらざれば、命あるべくもあらず、もしまことに天に心あり、理もありて、善人に國を與へて、よく治めしめむとならば、周の代のはてかたにも、必又聖人は出ぬべきを、さもあらざりしはいかにぞ、もし周公孔子にして、既に道は備れる故に、其後は聖人を出さずといはむも、又心得ず。かの孔丘が後、其道あまねく世に行はれて、國よく治まりたらむにこそさもいはめ。其後しもいよ〳〵其道はすたれはてゝ、徒言となり、國もます〳〵みだれつる物を、今はたれりとして、聖人をも出さず、國の厄をもかへりみず、つひに秦始皇がごと荒ぶる人にしも與へて、人草を苦しめしは、いかなる天のひがこゝろぞ。いと〳〵いぶかし。始皇などは、天のあたへしに非る故に、久しくはえたもたず、ともいひ枉べけれど、そも暫にても、さる悪人にあたふべき理あらめやも。又國をしる君のうへに、天命のあらば、下なる諸人のうへにも、善悪きしるしを見せて、善人はながく福え、悪人は速けく禍るべき理なるを、さはあらずて、よき人も凶く、あしき人も吉きたぐひ、昔も今も多かるはいかに。もしまことに天のしわざならましかば、さるひがことはあらましや。さて後世になりては、やうやく人心さかしきゆゑに、國を奪ひて天命ぞといふをば、世人の諾なはねば、うはべ

は譲らせて取ることもあるをば、よからぬことにいふめれど、かの古の聖人どもも、實は是に異ならぬ物をや。後世の王の天命ぞといふをば、信ぬものゝ、古人の天命をば、まことゝ心得をるは、いかなるまどひぞも。古は天命ありて、後にはなきこそをかしけれ。或人、舜は堯が國をうばひ、禹も又舜が國を奪へりしなりといへるも、さも有べきことぞ。後世の王莽曹操がたぐひも、うはべはゆづりを受て嗣つれども、實は簒へるを以て思へば、舜禹などもさぞありけむを、上代は朴にして、譲れりと云なせるを、まことゝ心得て、國内の人ども、みなあざむかれにけらし。かの莽操がころは、世人さかしくて、あざむかれざりし故に、悪きしわざのあらはれけむ。かれらが如くなる輩も、上代ならましかば、あはれ聖人と仰がれなましものを。

禍津日神の御心のあらびはしも、せむすべなく、いとも悲しきわざにぞありける。

世間に、物あしくそこなひなど、凡て何事も、正しき理のまゝにはえあらずて、邪なることも多かるは、皆此神の御心にして、甚く荒び坐時は、天照大御神高木大神の大御力にも、制みかね賜ふをりもあれば、まして人の力には、いかにともせむすべなし。かの善人も禍り、悪人も福ゆるたぐひ、尋常の理にさかへる事の多かるも、皆此神の所爲なるを、外國には、神代の正しき傳説なくして、此所由をえしらざるが故に、たゞ天命の説を立て、何事もみな、當然理を以て定めむとするこそ、いとをこなれ。

然れども、天照大御神高天原に大坐々て、大御光はいさゝかも曇りまさず、此世を御照しましまし、天津御璽はた、はふれまさず傳はり坐て、事依し賜ひしまに〳〵、天の下は御孫命の所知食て、

皇國は、本より主の定まれるがなければ、たゞ人もたちまち王になり、王もたちまちたゞ人にもなり、亡びうせもする、古よりの風俗なり。さて國を取むと謀りて、えとらざる者をば、賊といひて蔑しめにくみ、取得たる者をば、聖人といひて尊み仰ぐめり。さればいはゆる聖人も、たゞ賊の爲とげたる者にぞ有ける。掛まくも可畏きや吾天皇尊はしも、然るいやしき國々の王どもと、等なみには坐まさず。此御國を生成たまへる 神祖命の、御みづから授賜へる皇統にまし〳〵て、天地の始より、大御食國と定まりたる天下にして、大御神の大命にも、天皇悪く坐まさば、莫まつろひそとは詔たまはずあれば、善く坐むも悪く坐むも、側よりうかゞひはかり奉ることあたはず。天地のあるきはみ、月日の照す限は、いく萬代を經ても、動き坐ぬ大君に坐り。故古語にも、當代の天皇をしも、神と申して、實に神にし坐ませば、善悪き御うへの論ひをすてゝ、ひたぶるに畏み敬ひ奉仕ぞ、まことの道には有ける。然るを中ごろの世のみだれに、此道に背きて、畏くも大朝廷に射向ひて、天皇尊をなやまし奉れりし、北條義時泰時、又足利尊氏などが如きは、あなかしこ、天照日大御神の大御蔭をもおもひはからざる、穢悪き

賊奴どもなりけるに、禍津日神の心はあやしき物にて、世人のなびき従ひて、子孫の末まで、しばらく栄え居しことよ。抑此世を御照し坐ます天津日神をば、必たふとみ奉るべきことをしれども、天皇を必畏こみ奉るべきことをば、しらぬ奴もよにありけるは、漢籍意にまどひて、彼國のみだりなる風俗を、かしこきことにおもひて、正しき皇國の道をえしらず、今世を照し坐ます天津日神、即天照大御神にましますことを信ず、今の天皇尊、すなはち天照大御神の御子に坐ますことを忘れたるにこそ。

天津日嗣の高御坐は、

天皇の御統を日嗣と申すは、日神の御心を御心として、其御業を嗣坐が故なり。又その御坐を高御坐と申すは、唯に高き由のみにあらず、日神の御坐なるが故なり。日には、高照とも高日とも日高とも申す古語のあるを思へ。さて日神の御坐を、次々に受傳へ坐て、其御坐に大坐ます天皇命にませば、日神に等く坐こと決し。かゝれば、天津日神のおほみうつくしみを蒙らむ者は、誰しか天皇命には、可畏み敬び尊みて、幸仕らざらむ。

あめつちのむた、ときはにかきはに動く世なきぞ、此道の霊く奇く、異國の萬の道にすぐれて、正しき高き貴き徴なりける。

漢國などは、道てふことはあれども、道はなきが故に、もとよりみだりなるが、世々にますま

す亂れみだれて、終には傍の國人に、國はことゞくうばはれはてぬ、其は夷狄といひて卑めつゝ、人のごともおもへらざりしものなれども、いきほひつよくして、うばひ取りつれば、せむすべなく天子といひて、仰ぎ居るなるは、いともいともあさましきありさまならずや。かくても儒者はなほよき國とやおもふらむ。王のみならず、おほかた貴きいやしき統さだまらず、周といひし代までは、封建の制とかいひて、此別ありしがごとくなれど、それも王の統かはれば、下までも共にかはりつれば、まことは別なし。秦よりこなたは、いよゝ此道たゝず、みだりにして、賤き奴の女も、君の寵のまに〳〵、忽に后の位にのぼり、王の女をも、すぢなき男にあはせて、恥ともおもへらず。又昨日まで山賤なりし者も、今日はにはかに、國の政とる高官にもなり登るたぐひ、凡て貴賤き品さだまらず、鳥獣のありさまに異ならずなもありける。そも此道は、いかなる道ぞと尋ぬるに、天地のおのづからなる道にもあらず、

是をよく辨別て、かの漢國の老荘などが見と、ひとつにな思ひまがへそ。

人の作れる道にもあらず、此道はしも、可畏きや高御産巣日神の御靈によりて、

世中にあらゆる事も物も、皆悉に此大神にみたまより成れり。

神祖伊邪那岐大神伊邪那美大神の始めたまひて、

よのなかにあらゆる事も物も、此二柱大神よりはじまれり。

天照大御神の受たまひたもちたまひ、傳へ賜ふ道なり。故是以神の道とは申すぞかし。

神道と甲す名は、書紀の石村池邊宮の御巻に、始めて見えたり。されど其は只、神をいつき祭りたまふことをさして云るなり。さて難波長柄宮の御巻に、惟神者謂隨二神道一亦自有神道也とあるぞ、まさしく皇國の道を廣くさしていへる始なりける。さて其由は、上に引ていへるが如くなれば、其道といひて、ことなる行ひのあるにあらず、さればたゞ神をいつき祭りたまふことをいはむも、いひもてゆけば一むねにあたれり。然るを、からぶみに、聖人設二神道一といふ言あるを取て、此方にも名けたりなどいふめるは、ことのこゝろしらぬみだり言なり。其故は、まづ神とさすもの、此と彼と始より同じからず、かの國にしては、いはゆる天地陰陽の、不測く靈きをさしていふめれば、たゞ空き理のみにして、たしかに其物あるにあらず。さて皇國の神は、今の現に御宇天皇の皇祖に坐て、さらにかの空き理をいふ類にはあらず。さればかの漢籍なる神道は、不測くあやしき道といふこゝろ、皇國の神道は、皇祖神の、始め賜ひたもち賜ふ道といふことにて、其意いたく異なるをや。

さて其道の意は、古事記をはじめ、もろ〳〵の古書どもをよく味ひみれば、今もいとよくしらるゝを、世々のものしりびとどもの心も、みな禍津日神にまじこりて、たゞからぶみにのみ惑ひて、思ひとおもひいひといふことは、みな佛と漢との意にして、まことの道のこゝろをば、えさ

とらずなもある。

古は道といふ言擧なかりし故に、古書どもに、つゆばかりも道々しき意も語も見えず。故舍人親王を始め奉て、世々の識者ども、道の意をえとらへず、たゞかの道々しきことこちたく云る、から籌の說のみ、心の底にしみ着て、其を天地のおのづからなる理と思居る故に、すがるとは思はねども、おのづからそれにまつはれて、彼方へのみ流れゆくめり。されば異國の道を、道の羽翼となるべき物と思ふも、卽其心のかしこへ奪はれつるなりけり。大かた漢國の說は、かの陰陽乾坤などをはじめ、諸皆、もと聖人どもの己が智をもて、おしはかりに作りかまへたる物なれば、うち聞には、ことわり深げにきこゆめれども、彼が垣內を離れて、外よりよく見れば、何ばかりのこともなく、中には淺はかなることゞもなりかし。されど昔も今も世人の、此垣內に迷入て、得出離れぬこそくちをしけれ。大御國の說は、神代より傳へ來しまゝにして、いさゝかも人のさかしらを加へざる故に、うはべはたゞ淺々と聞ゆれども、實にはそこひもなく、人の智の得測度ぬ、深き妙なる理のこもれるを、其意をえしらぬは、かの漢國書の垣內にまよひ居る故なり。此をいではなれざらむほどは、たとひ百年千年の力をつくして、物學ぶとも、道のためには、何の益もなきいたづらわざならむかし。但し古書は、みな漢文にうつして書たれば、彼國のことも、一わたりは知てあるべく、文字のことなどしらむためには、漢

籍をも、いとまあらば學びつへし。皇國の定まりて、たゞよはぬうへにては、害はなきものぞ。

故おのが身々に受行ふべき神道の教などいひて、くさ〴〵ものすなるも、みなかの道々のをしへごとをうらやみて、近き世にかまへ出たるわたくしごとなり。

こと〴〵しく祕説など云て、人えりして密に傳ふる類など、皆後世に僞造れることぞ。凡てよきことは、いかにも〳〵世に廣まるこそよけれ。ひめかくして、あまねく人に知せず、己が私物にせむとするは、いとこゝろぎたなきわざなりかし。

あなかしこ、天皇の天下しろしめす道を、下が下として、己がわたくしの物とせむことよ。

下なる者は、かにもかくにもたゞ上のおもむけにゐ居るこそ、道にはかなへれ。たとへ神の道の行ひの、別にあらむにても、其を教へ學びて、別に行ひたらむは、上にしたがはぬ私事ならずや。

人はみな、産巢日神の御靈によりて、生れつるまに〳〵、身にあるべきかぎりの行は、おのづから知てよく爲る物にしあれば、

世中に生としいける物、鳥虫に至るまでも、己が身のほど〳〵に、必あるべきかぎりのわざは、産巢日神のみたまに賦て、おのづからよく知てなすものなる中にも、人は殊にすぐれたる物と

うまれつれば、又しか勝れたるほどにかなひて、知べきかぎりはしり、すべきかぎりはする物なるに、いかでか其上をなほ強ることのあらむ。教によらずては、えしらずえせぬものといはゞ、人は鳥虫におとれりとやせむ。いはゆる仁義禮譲孝悌忠信のたぐひ、皆人の必あるべきわざなれば、あるべき限は、教をからざれども、おのづからよく知てなすことなるに、かの聖人の道は、もと治まりがたき國を、しひてをさめむとして作れる物にて、人の必有べきかぎりを過て、なほきびしく教へたてむとせる強事なれば、まことの道にかなはず。故口には人みなことゞ〳〵しく言ながら、まことに然行ふ人は、世々にいと有がたきを、天理のまゝなる道と思ふは、いたくたがへり。又其道にそむける心を、人慾といひてにくむも、こゝろえず。そも〳〵その人慾といふ物はいづくよりいかなる故にていできつるぞ、それも然るべき理にてこそは、出來たるべければ、人慾も即天理ならずや。又百世を經ても、同姓どち婚することゆるさずといふ制など、かの國にしても上代より然るにはあらず、周の代のさだめなり。かくきびしく定めたる故は、國の俗あしくして、親子同母兄弟などの間にも、みだりなる事のみ常多くて、別なく治まりがたかりし故なれば、かゝる制のきびしきは、かへりて國の恥なるをや。すべて何の上にも、法の嚴きは、犯すものゝ多きがゆゑぞかし。さて其制は制と立しかども、まことの道にあらず、人の情にかなはぬことなる故に、したがふ人いと〳〵まれなり。後々はさらに

もいはず、はやく周の代のほどにすら、諸侯といふきはの者も、これを破れるが多ければ、ましてつぎ〳〵はしられたり。姉妹などにさへ新けし例もある物をや。然るを儒者どもの、昔よりかく世人の守りあへぬことをば忘れて、いたづらなるさだめのみをとらへて、たけきことにいひ思ひ、又皇國をしひて賤しめむとして、ともすれば、古兄弟まぐはひせしことをいひ出て、鳥獣のふるまひぞとそしるを、此方の物知人たちも、是をばこころよからず、御國のあかぬことに思ひて、かにかくにいひまぎらはしつゝ、いまださだかに斷り說ることもなきは、かの聖人のさかしらを、かならず當然理と思ひなづみて、なほ彼にへつらふ心あるがゆゑなり。もしへつらふこゝろしなくば、彼と同じからぬは、なにごとかあらむ 抑皇國の古は、たゞ同母兄弟をのみ嫌ひて、異母の兄弟など御合坐しことは、天皇を始め奉て、おほかたよのつねにして、今京になりてのこなたまでも、すべて忌ことなかりき。但し貴き賤きへだては、うるはしく有て、おのづからみだりならざりけり。これぞこの神祖の定め賜へる、正しき眞の道なりける。然るを後世には、かのから國のさだめを、いささかばかり守るげにて、異母なるをも兄弟と云て、婚せぬことにも定まりぬる。されば今世にして、其を犯さむこそ惡からめ、古は古の定まりにしあれば、異國の制を規として、論ふべきことにあらず。

いにしへの大御代には、しもがしもまで、たゞ天皇の大御心を心として、

天皇の所思看御心のまに〳〵奉任て、己が私心はつゆなかりき。
ひたぶるに大命をかしこみゐやひまつろひて、おほみうつくしみの御蔭にかくろひて、おのもおのも祖神を齋祭つゝ、
天皇の、大御皇祖神の御前を拜祭坐がごとく、臣連八十伴緒、天下の百姓に至るまで、各祖神を祭るは常にて、又天皇の、朝廷のため天下のために、天神國神諸をも祭坐が如く、下なる人どもゝ、事にふれては、福を求むと、善神にこひねぎ、禍をのがれむと、惡神をも和め祭り、又たまたま身に罪穢もあれば、祓清むるなど、みな人の情にして、かならず有べきわざなり。然るを、心だにまことの道にかなひなば、など云めるすぢは、佛の教へ儒の見にこそ、さることもあらめ、神の道には、甚くそむけり。又異國には、神を祭るにも、たゞ理を先にしてさま〴〵議論あり。淫祀など云て、いましむることもある、みなさかしらなり。凡て神は、佛などいふなる物の趣とは異にして、善神のみにはあらず、惡きも有て、心も所行も、然ある物なれば、惡きわざする人も福え、善事する人も、禍ることある、よのつねなり。されば神は、理の當不をもて、思ひはかるべきものにあらず、たゞその御怒を畏みて、ひたぶるにいつきまつるべきなり。されば祭るにも、そのこゝろばへ有て、いかにも其神の歡喜び坐べきわざをなも爲べき。そはまづ萬を齋忌清まはりて、穢惡あらせず、堪たる限美好物多に獻り、或は琴

ひき笛ふき歌儛ひなど、おもしろきわざをして祭る、これみな神代の例にして、古の道なり。然るをたゞ心の至り至らぬをのみいひて、獻る物にもなすわざにもかゝはらぬは、漢意のひがことなり。さて又神を祭るには、何わざよりも先火を重く忌清むべきこと、神代巻の黄泉段を見て知べし。是は神事のみにもあらず、大かた常にもつゝしむべく、かならずみだりにすまじきわざなり。もし火穢るゝときは、禍津日神ところをえて、荒び坐ゆゑに、世中に萬の禍事はおこるぞかし、かゝれば世のため民のためにも、なべて天下に、火の穢は忌まほしきわざなり。今の代には、唯神事のをり、又神の坐地などにこそ、かづ〳〵も此忌は物すめれ。なべては然る事さらになきは、火の穢などいふをば、心得ざることゝおもふ、なまさかしらなる漢意のひろごれるなり。かくて神御典を釋誨ゆる世々の識者たちすら、たゞ漢意の理をのみ、うるさきまで物して、此忌の説をしも、なほざりにすめるは、いかにぞや。

ほど〳〵にあるべきかぎりのわざをして、穏しく楽く世をわたらふほかなかりしかば、かくあるほかに、何の教ことをかもまたむ。抑みどり兒に物教へ、又諸匠の物造るすべ、其外よろづの伎藝などを教ふることは、上代にも有けむを、かの儒佛などの教事も、いひもてゆけば、これらと異なることなきに似たれども、よく辨ふれば、同じからざることぞかし。

今はた其道といひて、別に教を受て、おこなふべきわざはありなむや。

然らば神の道は、からくにの老荘が意にひとしきかと、或人の疑ひ問へるに、答けらく、かの老荘がともは儒者のさかしらをうるさみて、自然なるをたふとめば、おのづから似たることあり。されどかれらも、大御神の御國ならぬ、惡國に生れて、たゞ代々の聖人の說をのみ聞なれたるものなれば、自然なりと思ふも、なほ聖人の意のおのづからなるにこそあれ。よろづの事は、神の御心より出て、その御所爲なることをしも、えしらねば、大旨の甚くたがへる物をや。

もししひて求むとならば、きたなきからぶみごゝろを祓ひきよめて、清々しき御國ごゝろもて、古典どもをよく學びてよ。然せば、受行べき道なきことは、おのづから知てむ。其をしるぞ、すなはち神の道をうけおこなふにはありける。かゝれば如此まで論ふも、道の意にはあらねども、禍津日神のみしわざ、見つゝ默止えあらず、神直毘神大直毘神の御靈たばりて、このまがをもて直さむとぞよ。

上の件、すべて己が私のこゝろもていふにあらず。ことごとに古典に、よるところあることにしあれば、よく見む人は疑はじ。

かくいふは、明和の八年といふとしの、かみな月の九日の日、伊勢國飯高郡の御民、平阿曾美宣長、かしこみかしこみもしるす。

玉鉢百首

玉鉾百首

本居宣長詠

都伎賢木伊豆能御靈登天地爾伊照登富羅須日之大御神

天地之極美御照須高光日大神乃道者許能美知

高御座天津日嗣登日御子之受傳閇坐道者此道

天能下靑人草乃朝夕邇御蔭登余曾留美知波此道

二柱御祖神叙玉予能世中之道波士米賜幣流

天乃下國者意富祁杼神漏岐乃生成坐流大八嶋國

日神之本都御國登皇國波斯百八十國之富久邇淤夜久邇

百國之國之麻富良者大倭吾大君乃所聞食須久邇

詞斯古伎夜皇御國者可怜國宇良夜須乃國玖邇能眞秀國

毛毛夜蘇登國者阿禮杼母日之本乃許禮乃倭爾麻須國波不有

天地能曾伎幣能伎波美覓奴登母御國邇麻志已余伎國有米夜

大穴牟遲少名御神之與呂斯玖母造堅米斯意富夜斯麻久爾

佐比豆流夜登許余乃我之八十國波少名毘古那叙造勢理祁牟
物皆者變行杼母明都神吾大君之御代者常斯閇
國國之君者雖易高光吾日御子之御代者不變
天照夜月日乃影哀斯琉國者本都御國爾仕奉邪羅米夜
諸〳〵之訶良國人母日神之光斯得受波如何加母世牟
佐加志良爾言擧波爲禮杼漢國母比留賣乃神乃照須國丙哀
皇神之道斯羅涅許曾言佐幣我國人波佐加志良須那禮
天知哉日之大神乃道哀賀豆樣佐能道爾麻度布世之人
明良祁伎日大神之道斯良奴漢乃佐加志良驟多都那由米
外國波神代之傳聞無祁禮許曾誠之道哀不知有祁禮
國國邇傳者雖有日之本爾本之實之說波傳波流
上代之形余玖見與石上古事記者麻蘇美之鏡
麻都夫佐邇伊迦傳斯良麻斯伊爾志幣哀日本御紀能世爾無加理勢婆
神乃世乃事等許登碁登傳來豆記勢流御書見禮婆多布斗志
麻蘇鏡見牟登思波婆漢說之塵章玖毛禮理磨豆斯余祁牟

斯留辨須登醜之物知中中爾余許佐能美知邇人令惑母
佐加志良爾神代之御書說麻宜弖漢乃意爾那須賀悲佐
漢意那斯登思閇杼書等余牟人乃心者猶敍戎那琉
漢心直志賜幣登大直毘神能直毘袁許比能美奉禮
伊豆能賣之伊豆能御魂袁得弖斯阿羅婆漢之曲禮流事覺弖牟
比佐加多能天津月日之影者見士戎乃意之雲志晴受波
戎書之佐羈伊布世美科戶邊之神之伊夫伎乃風待吾者
下濁流漢籍川者登許滑之可畏川敍足蹈勿由米
伎毛牟加布心佐玖士理中中爾漢之教敍人阿斯久須流
御國波斯日乃神國登人草能心母直斯行比母余斯
訶良邪麻乃佐加志良心移理弖敍世人之心惡成奴琉
日本之倭袁淤伎弖外國邇牟迦流心者那邇能許許呂敍
言擧勢奴國爾波有杼母枉說之言擧許知多美言擧爲吾者
禍津日伊世人之耳加布多具羅牟眞事語禮婆聽人乃無伎
阿夜志伎波許禮能天地諾那諾那神代者殊爾阿夜志久有祁牟

斯良由倍伎物那良那久爾世間乃久斯伎許登和理神那良受斯旦
斯留登伊布波へ誰乃癡物測旦母余能許登和理波底比那伎物
玖須波へ斯伎許登和理不知旦漢人之物之理說賀波加那佐
阿夜志伎袁阿良土登伊布波余能那迦能阿夜志伎斯良奴癡心訶母
佐加志祁杼人乃智者限有袁神代乃斯和邪伊加傳測牟
人皆之物之物加邇加久爾思測旦伊布波漢說
傳聞へ無伎事者可知由母無志斯良延奴事者不知旦袁有牟
傳波志那玖登母似多流類阿羅婆富訶爾那蘇幣旦斯留許登母阿羅牟
世間乃阿流淤母夫伎へ波何事母神世之跡袁尋旦斯良由
諸〳〵之成出琉本者神產巢日高御產巢日之神乃產靈玖
阿羅波邇能事者大皇迦徵事者大國主乃神之御心
目爾見延奴神之心之神碁登へ波可畏物玖淤富爾勿思曾
世中之善母惡母許登碁登爾神之心乃志和邪爾玖阿留
吉事爾麻賀事伊都藝禰事者吉事伊都具世間之美知
余能那訶へ波余碁登へ麻賀事行加へ波流中用玖知遲乃事者那理豆流

許登和理乃麻麻爾母不有弖横佐麻能吉伎母惡伎母神乃心敍
百不足八十禍津日之禍事登善袁伎羅幣夜善人吉勢奴
吉人袁余邇苦牟琉禍津日之神乃心之須辨母須辨無佐
天照大御神須良知波夜夫琉神之須佐備波畏美坐伎
負氣那久人之伊夜斯伎力以神能那須和邪爭比得米夜
阿治伎那伎何乃佐迦志良靈治波布神伊都加受弖意富呂加爾爲弖
伊奢古杼母佐加志良勢受弖靈治波布神乃美志和邪助奉漏閇
袁遲那伎賀麻玖流思弖神登雖云人爾不勝登云賀愚佐
迦徵登伊幣婆皆比登斯久夜思良牟鳥那流母阿理虫在母有袁
伊夜斯祁杼雷樹靈狐虎龍之類母神之片端
釋迦孔子母神爾志阿禮婆其道母廣祁伎神之道之枝道
伊都玖倍伎神多知置弖外國能氣志伎神袁良伊都久諸人
多那都物百之木草母天照須日之大神之米具美延弖許曾
乾與比爾物喰每爾豐宇氣能神乃米具美袁思閇世之人
天地之神能米具美志無有勢婆一日一夜母有得弖麻斯夜

八雲立出雲神袁奈何渕母布大國主袁人者不知夜母
命繼食物衣物住家良君之米具美敍神乃米具美敍
天照神之御民敍御民等袁意富呂加邊爲勿阿豆加禮流比登
物作民者御寶作良受波如何爲牟登加民苦牟琉
皇神乃米具久思富須人草敍世中之人阿斯久須那由米
世世乃祖乃美加宜忘勿代代乃祖波已賀氏神已賀家之神
父母者我家能迦徴吾神登心令盡弖伊都神人之子
怒延草乃賣古夜都古良波皇神之授祁斯賣宇都玖志美勢與
加母加久母時之御令爾不背敍神能麻許登乃道爾波在祁流
時〳〵之御法母神乃時〳〵乃御命爾斯阿禮婆伊迦傳違牟
今世者今能美能理袁畏美弖異志伎渕許那比行勿由米
夜須久爾乃夜須良祁伎余爾生禮遇弖安祁久弖有婆物思母那志
刈薦之亂禮理斯佐麻閇時斯袁佐麻禮流余波貴久有祁理
皇神之寄勢流御年袁志飽至給弖在賀多怒斯佐
事志有禮婆宇禮志迦那志登時〳〵爾動心敍人之眞心

動久許曾人乃眞心不動登言豆富許良布人者石木加
眞心袁都都美麗志豆加邪羅比豆偽爲者漢之風俗
唐人之所爲那良比豆加邪良比豆思布眞心偽留倍志夜
多麻佐波流二世者由加奴宇都曾美袁伊加邇爲者加母不死豆在牟
宇都曾美波須辨無物加阿加那久爾此世別豆羅流思閇婆
伎多那久爾豫美乃國方者伊那志許米千代常登波爾許能余爾母賀母
知波夜夫流神之心袁那甚米受波八十之禍事那爾登能賀禮牟
家母身母國母令穢勿氣賀禮波志神之忌坐由由斯伎罪袁
鹽之火乃穢由由斯母家内者火志穢留禮婆禍起母能
穢袁志罪登母斯良邇美曾賀受豆默止在人袁見流賀伊布勢佐
阿那可長豫母都戸喫乃麻賀用理敍諸之禍遂許理初祁琉
都美志阿羅婆清河瀬爾禊爲豆速秋津比賣爾早明良米與
麻賀許登袁美曾賀勢禮許曾世袁照須月日之神者成出坐禮

阿麻理歌

加都賀都母百知乃歌爾伊佐杼富琉心乃袁呂袁能婆幣都琉加母

思事宇多幣婆那藝奴言靈之幸波布驗麻佐斯迦理祁理

百歌爾斗遍米弖波阿禮杼千首遍母思心者豈不盡加母

登許斯幣爾世袁照志坐日之御靈託斯鏡波伊勢之大神

比牟詞志能國言向弖御劔者熱田宮遷志豆麻理伊坐

比佐加多乃天都日嗣乃御寶登御所放多奴夜佐加勾玉

水垣之宮之大御代者天地乃神袁齋比弖國榮祁理

眼炎耀財之國袁言向乃神乃佐登斯波貴伎呂加母

古辭袁伊麻爾都婆良爾傳來弖文字母御國乃一美多迦良

古須宜余斯蘇我馬子者天地乃曾許比能宇羅爾阿麻流罪人

久那多夫禮宇麻古賀罪母伎多米受弖佐加志良人乃勢斯波那爾和邪

馬子良賀草牟須加婆遅得弖志賀母斬弖波布理弖恥令見麻斯袁

和多能底奥都伊玖理爾麻土理祁牟君之護乃都流藝陀知波夜

鎌倉之平乃阿曾賀逆和邪袁宇倍大君之怒勢理祁琉

隱伎乃島弓箭訶久美豆伊傳麻志斯御心思間婆涙志那賀流
意母富佐奴隱伎乃幸行聞時者志豆能男吾母髮逆起衰
鎌倉之平之子等賀多波和邪波蘇我乃宇麻古爾罪渉登良米衣
大皇衰令惱奉斯多夫禮良賀民波具久美豆余衰阿邪牟伎斯
禍津日之其禍和邪爾世之人母相麻士許理斯時之悲佐
善人登云者誰言鎌倉乃平乃子等波國之罪人
負氣那久皇國攻牟登唐之戎乃許伎斯賀多波和邪志祁流
可畏伎夜皇御軍爾伊牟加比豆那夜米奉理斯多夫禮足利
伊加那琉夜神之荒備敍麻紀能立荒山中爾君賀御代經斯
戎國爾媚豆都加閇豆足利乃醜乃臣皇國氣賀志都
天乃下常夜行那須阿斯加賀能須惠能美陀禮乃亂世由由志
何時麻傳加光隱良牟比佐加多能天乃伊波斗波唯暫時許曾
倭文機衰織田乃命者朝廷邊衰拂靜米豆伊蘇志伎意富渉美
麻都漏波奴國等許登碁登麻都漏船豆朝廷清米斯豐國神
豐國乃神之御稜威者毛呂許志乃戎乃許伎斯母渉遲麻度布麻傳

玉鉾百首終

玉鉢百首解

玉鉾百首解序

たまほこのもゝうたは。靈(ミタマ)ぢはふ神の御代より。やすみしゝわが大君の御代々々に。傳はり來ぬる。玉矛の道わけいるべきこゝろばへを敎へたまへる。吾師(ノリノ)さくすゞの鈴屋大人の歌になもありける。そば高光る日の大神の。天地にてりとほらひまして。大御光の。たぐひなく尊(タフト)きことをよみ給へるを。始めとして。かしこきや東照神命(アヅマテラスカミ)の。安國としづめまして。天地のよりあひの極(キハ)み動きなく。榮えまさむ大御代の。惠(メグ)ふかき御功績(イサヲ)の。あやに貴き事までを。淺茅原つばらにをしへ給へる。此百歌(モヽウタ)をよみ見む人は。天の下國は多けど。この大御國にならぶ國なく。日の大神の本つ御國と。いよゝます〳〵貴みて。神代の傳へなき外國(トツクニ)の。横さの道に入えめて。したにごれるから書川(フミ)の流れにおぼれ。漢意(カラブミ)のさ霧にまどへる。世の人どもゝ。天照す日の大御神の道は此道と。さとり得てつひにしきしまの倭たましひとなりて。百たらず八十狂日神(マガツヒ)の。まが心をはらひ清めて。神直日神(カムナホビノ)大直日神(オホナホビノ)の。御靈(ミタマ)のふゆをかゞふりつゝ。此玉ほこの道分いらむ人ぞおほからむかし。こゝにわが友稻懸大平は。大人の御許にちかく家をらして。朝夕(アサヨヒ)になれつかへて。いとも尊き敎(ノリ)のかぎりを學び得て。大人の敎子(ノリコ)はさはなる中にも。物まめやかにいにしへ尊む心深

くて。書籍（フミ）さとることも。歌よむ事も。人よりまさりてなもありける。かゝれば此まことの道の尊とき事をも。人より深くわきためさとりて。此百首（モヽカタ）の注釋を物して。意辭（コヽロトバ）のとけがたきふしぐ〳〵を。ねもころに解（ト）あきらめて。よむ人のしるべとなもせられける。かれこの八束穗のいかし穗の。稻掛ぬしの眞心を。おむかしみたふとみ思ふこゝろのかたはしを。かきのばへて。はしがきとなしぬ。かくいふは學びのはらからなる。　出雲人出雲宿禰俊信

玉ほこ百首解はしかき

世の中の萬の事、神の御蔭にもれたるはなきを、それが中にも、ことに尊くうれしきは、直日の神の御靈にぞありける。天の下、安國のうら安に、賑ひ榮えて、すたれたる萬のみち〳〵も、つぎ〳〵におこるめる中に、古事學びの、いやましにおこなはるゝことよ。そも〳〵此ふることまなびの始は、難波の契沖あざり、古き代の書どもを見明らめて、すぐれたる注釋どもを物せられけるを、そのかみ大かたの世には、しる人もなかめりしをたゞ一所、水戸の殿のさとくきこしめし信して、安藤何がしを使にさして、ねんごろにとふらはせ給ひつゝ、萬葉集の代匠記など、かゝしめ給ひけるなどぞ、そのはじめなりけむ。しかはあれど、世にひろくおこなはるゝ事は、遠江のくにの岡部大人の、田安の殿につかうまつりて、さま〴〵仰ごとゞもをうけたまはり、雄々しき倭だましひをたてゝ、正しきいにしへ意を、ひたふるにをしへみちびき、世の人々をいざなひて、うけばり物せられけるほどになん、やう〳〵天の下にはひろまりけるを、わが本居大人は、その學びを受つぎて、いにしへ今の書どもの、意こと葉を、いよ〳〵深く考へて、神代の御ふみの尊く妙なるおもむきを、深くさとり、こまかにわきまへてなん、こゝらの書ども、書あらはし

玉ひけるほどに、わが殿の家人にめして、つかうまつらしめ玉ひなど、厚き御惠の光さへそひて、大人の功もいよ〳〵たちて、このまなびの道、世にみさかりになるまゝに、年ごろ四方の國々より、したひまゐりて、したがへるともがらも、いよ〳〵おもひはげみつゝ、その業をあひたすけて、世にひろむるなかに、稻掛のおほ平ぬしは、ことにこの大人のやまとごゝろを、大かたの世にあまねくさとさんの心まめやかにて、まづ此百首のさとし歌のこゝろをときあらはして、二ばしら御祖の神のはじめ給へる、たふとくたへなる道のもとをたどり、あやしくくすしかりし神代のおもむきをもて、今のよにありとある事のことわりをなぞらへしり、よき事あしきことのゆきかはる、神ごとのかしこき御しわざをもわきまへ、黃泉の國のきたなき穢の、ゆゑよしをさとりて、竈所の火の、いみしくたいじなる事をおもひ、身のけがらひは、清き川瀨におりたちはらひ、禍津日の神の御あらびに、みだれりしみだれ代のありさまにくらべては、安國のやすらけき御世をあふぎ、道のまことをしりて、かみの御蔭をうれしみ、今の代は、今の御おきてにしたがふをよしとし、おのがわたくしの、世に異なる行ひをいましめなどし給へるこゝろを、よの人にしめさんとて、此二卷の注解をものせられける。げに初學びのともがらはさらにもいはず、世のいとなみにかゞつらひて、ひろく書見るいとまなからん人々なども、をり〳〵にひらき見て、神國のこゝろをしらば、古ことまなびいよ〳〵ひろまりて、この注解の、つとめたるねがひもかひあり

て、上中下の人のこゝろうちあひて、おとろへたまへる神の御社をもてなほし、絶たる神わざをおこさせ給ひなどして、後やう〳〵にふるき代のてぶりにかなひもてゆき、天地とゝもに、てらす月日の、かぎりなく、明らけき御代は、いや榮えにさかゆかんと、いともかしこき神の御かげを、あなかしこ、今より思ふも、うれしくたのもしくて、かくなむ。

紀伊國玉津島社司上總介從五位下　橘朝臣房雄

玉鉾百首解上巻

この百首の歌は、神の道の、尊くすぐれたることをしらざる、なべての世の人をさとし、またいにしへ學びする人もいまだわきまへぬ事ども多くして、古意にたがへることあるなどを、いきどほりて、わが本居大人の、はやくよみおきたまへる歌なり。此歌、いにしへのすがたにならひてよみ給へれば、中には、耳なれぬ詞などもまじれるを、いぶかしがる人〻もあれば、これがちうさくを物し侍るになん。稻掛大平。

つきさかきいづのみたまと天地にいてりとほらす日の大御神

○つきさかきは、齋き賢木にて、清淨にいつき清めたる賢木をいふ。この詞は、伊豆といはん枕詞なり。○いづは、明つといふと同じくて、清淨なるをいふ詞なり。○いづのみたまとは、清淨なる御靈とまうす意なり。天照大御神は、古事記に、是以伊邪那岐大神詔、吾者到於二伊那志許米志許米岐穢繁國一而在祁理、故吾者爲二御身之禊一而、到二坐竺紫日向之橘小門之阿波岐原一而、祓禊也、云々於是洗二左御目一時所成神名、天照大御神とありて、黄泉

國の汚垢を、はらひ清めたまひて、清淨になりはて給へる時に、生出たまへる日の大御神なる故にかく申せり。さて此詞は、日本紀神功巻に、神風伊勢國、百傳渡會縣之、拆鈴五十鈴宮所居神、名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命とありて、すなはち天照大御神の、御みづから御名のりたまへる御詞なり。御たまとのとは、とてといふ意なり。○いてりとほらすとは、天地のかぎり照りわたり給ふをいふなり。いは發言とて、言の上にそへていふこと古言におほし。○一首の意、清淨の御魂とて、天地の間に、いさゝかもいたらぬ隈なく照りとほりたまふ、日の大御神とよめるなり。此歌をはじめにおかれたること、意あるべし。道は清淨を旨とす。伊邪那岐大神の禊祓の功によりて、この大御神の成出ませることを深く味ふべく、又清淨の御靈なる故に、天地にてりとほり給ふといふ、二の句と三四の句とを、相てらして心得べきなり。

天つちのきはみ御てらすたかひかる日の大神のみちはこのみち

○天地のきはみとは、天地の限りいたらぬくまなくといふなり。○御てらすは、照り給ふなり。てらすなどいふ、用語にも、御の字をそへていふこと、古言におほく例あることなり。○高ひかるは、日といふことに、枕詞のやうにかうぶらする詞なり。高は、天といふに同じく、光るは、照るといふに同じきなり。○一首の意、天地の限てりわたり給ふ日の大御神の道といふは、此道ぞとなり。此道とさすところは、卽此百首の歌どもに、次々に見えたるおもむきなり。

高みくら天つ日嗣と日の御子のうけつたへます道はこの道

○たか御くらは、天皇の御座をいふなり。そは高き座なる故にいふにはあらず。高は、たかひかるの高と同じくて、天といふことなり。天皇の御座は、すなはち高天原の、天照大御神の御座なる故に、高御座と申すなり。○天つ日嗣とは、御代々々の天皇、天照大御神より、さづけたまへるまゝに、うけつぎたまふ御位を申すなり。猶くはしくは、師の古事記傳をひらき見て心得べし。○日の御子とは、天皇の御事なり。いく萬代の末々までも、天皇は、天照大御神の御末なれば、かく申すなり。○一首の意、日の御子の天つ日嗣として、受つたへましまず道は、この道ぞとなり。此道上に同じ。

天のした青人草のあさよひに御かげとよそる道はこの道

○あを人草とは、萬民をいふなり。○朝よひとは、朝も夕もなり。俗に常住不斷といふことなり。○御蔭は、俗にもおかげといふに同じ。○よそるは、寄るといふことなり、たのみにしてよりすがる意なり。○一首の意、天のしたの萬民の、朝夕に、御蔭として、たのみよる道は、この道ぞとよめるなり。右の三首、みちはこの道といへるは、天照大御神の道も、天皇の天つ日嗣受つぎ給ふ道も、萬民のつねに御蔭と頼みよる道も、皆この百首の歌に、つぎ〳〵によめる所の道にして、他のみちにはあらずといふなり。

二柱御おやの神ぞ玉鉾の世の中の道はじめたまへる

○ふたばしらとは、二神と申すことなり。○御おやの神は、伊邪那岐命、伊邪那美命、二神をまうすなり。○玉鉾とは、玉をつけたる鉾にて、みちといふ言の枕詞なり。さてこの百首を、たまぼこ百首といふは、此歌のこの辭をもて、名づけられたるにて、道の百首といふことなり。○世の中の道とは、まづ上の歌どもに、此道とある道にして、その外よろづの事にわたるべし。そも〳〵この二柱の大神、はじめて夫婦となり給ひて、國土を始め、野山海川木草火水にいたるまで、生出したまひ、萬の神々をうみ出し給ひ、竟に日の神、月の神をも、生出したまひたるなり。さてまづ夫婦のわざをなしはじめ給ふ。これぞ世の中のもろ〳〵のしわざの本にて、その外萬のわざを始め給へり。

天の下國はおほけど神ろぎのうみなしませるおほ八嶋國

○この天の下は、四海萬國をおしくるめていへり。○おほけどは、雖レ多とかきて、多けれどゝいふことなり。○神ろぎとは、皇祖とも、神祖ともかけり。天皇の大御先祖の御事なり。此歌にては、伊邪那岐、伊邪那美命をさして申すなり。大八嶋國は、古事記、日本紀に、この二柱の神の、國々をうみ給へる次第をいひて、その嶋すべて八つあるをもて、大八嶋國といふとあり。くはしくは、師の古事記傳、國號考等に見えたり。○うみなしませるは、うみ出し給

へるなり。なすといふも生の字なり。令出來ことなり。○一首の意、世界の内に、國は數しらず多くあれども、我天皇の御先祖、伊邪那岐、伊邪那美命の、生出し給へる國は、この大八嶋國なりとよめるなり。此國の外の、もろ〳〵の國は、たゞ潮の沫の凝りてなれるにて、二柱の生なしたまへる國にはあらず。

日の神のもとつ御國と御國はし百八十國のほくにおや國

○日の神とは、高天原にまし〳〵て、萬國をてらしまします、天つ日天照大御神を申すなり。○もとつ御國とは、日の神の生出たまへる、御本國といふことなり。この神は、かの筑紫の橘小門の、御禊に成出たまへれば、この皇國ぞ、御本國なりける。○御國はしは、此御國はといふなり、しは助辭なり。○百八十國とは、數の多きをいひて、いはゆる萬國なり。○ほくにとは、中にすぐれてよき國といふなり。くはしきことは、次々の歌にいふを合せ見べし。○おや國とは、萬國の本たる國といふなり。○一首の意、此日のもとは、日の神の、出現ましましたる御國なれば、萬國にすぐれて、萬國の上にたつ、第一の國なりとよめるなり。

百くにの國のまほらは大やまとわがおほ君のきこしをす國

○百國といふも、上の百八十國と、同じ心ばへなり。○國のまほらとは、萬國の中に、殊に勝れたる所といふなり。日本紀の神武巻に、大和の國をほめて、秀眞國とのたまひ、古事記に、

倭建命の御歌に、やまとは國の麻本呂波たゝなづく青垣山こもれる倭しうるはし。應神天皇の大御歌に、山城國葛野を、みさけたまひて知婆の加豆怒を見れば百ちたる家庭も見ゆ國の富も見ゆなど、又萬葉集にも此詞おほし。上の歌に、秀國とよめるも同じ。俗にいはゞ、あるが中に、正味の所といふにあたるなり。○大倭は、こゝにては、皇國の惣名の倭なり。○わが大君は、天皇の御事なり。○きこしをすは、きこしめす、しろしめすといふに同じ。○一首の意、百千の國の中に、第一に勝れたるよき國は、天皇のしろしめす、この日本ぞとよめるなり。

かしこきやすめら御國はうまし國うら安の國くにのまほくに

○かしこきやとは、皇といはんとて、まづ冠らせいへる詞なり。俗におそれおほきといふに同じ。○やの字は添ていへる辭なり。○すめら御國は、この御國を尊みていへるにて、天皇の御國といふ意なり。○うまし國は、美稱していふなり。物のよき事を、古言に、うましといへり。日本紀垂仁卷に、伊勢國をほめたるに、可怜國、萬葉集一卷に、何怜國ぞあきづしま倭の國は、これは大和一國のことをいへるなり。などあり。○うら安の國は、神武卷に、昔伊弉諾尊目二此國一曰、日本者浦安國、こは日本とかける文字にかゝはらず大和一國のことをいへるなり。萬葉集にも、うら安といふことあり、何も憂へもなく、よろづに心のやすらかなる國にて、俗にいはゞ、安樂なる國といふことなり。○くにのまほ國は、上の歌に、秀國とよめるに同じ。○一首の意、わが天皇のしろしめす此國は、うまし國なり。うら安の國な

り。國といふ國の中にすぐれたるよき國なりとよめるなり。百八十と國はあれども日の本のこれの倭にます國はあらず

○日の本は、倭の枕詞なり。萬葉集山部赤人の長歌、また續日本後紀、仁明天皇四十御賀の長歌などに見ゆ。○これの倭は、これのは、このといふに同じ。倭は、大和一國の名なれども、御國の惣號になれるなり。日の本といふ名のゆゑよし、倭といふよしなど、くはしくかの國號考に見えたり。○一首の意、百も千も國はあれども、この日本にまさる國はあらずとなり。天地のそきへのきはみまぎぬとも御國にましてよき國あらめや

○そきへは、天地の至れる限りをいふなり。はての所といはんが如し。○まぎぬともは、まぎは、覓の字の如し。ゆき求むともなり。○一首の意、天地の內ゆきはての所々まで、行て尋ね求めたりとも、此國に勝りて、よき國はあらじとなり、

大穴牟遲少名御神のよろしくも造りかためし大やしま國

○萬葉集第七、大穴道少御神作云々とあり。猶集中に多し。古事記に、故大國主神坐出雲之御大之御前時、自波穗乘天之羅摩船而、內剝鵝皮剝爲衣服、有歸來神、爾雖問其名不答、且雖問所從之諸神、皆白不知。爾多邇具久白言、此者久延毘古必知之、卽召久延毘古問時、答白此者神產巢日神之御子少名毘古那神、故爾白上於神

產巢日御祖命一者、答告此者實我子也、於子之中、自二我手俣一久岐斯子也、故與二汝葦原色許男命一爲二兄弟一而、作中堅、其國者故自レ爾大穴牟遲與二少名毘古那一二柱神相並、作堅此國一然後者、其少名毘古那神者、度二于常世國一也、とあり。この二柱の神は、相ならばして、此國を經營したまひしこと、なほ日本紀など、古書どもに見えたり。〇よろしくもは、不足ところなくの意なり。そも〳〵大八嶋國は、はじめ伊邪那岐命伊邪那美命の二柱の、うみおき給ひつれど、黄泉の段に、吾と汝と作れりし國、いまだ作りをへずとありて、いまだ作竟へたまはざりつる所々を、此大穴牟遲少名御神の二柱、よろしく作堅めなし給へるなり。

さひづるや常世のからの八十國は少名毘古那ぞつくらせりけむ

〇さひづるやは、からといふ枕詞なり、〇常世とは、海をへだてゝ、いと遥に遠き國をいふなり。とこよは、そきへといふと同意の言なり。〇からの八十國、からとは、西の方なる、海外の諸國をいふ名なり。もろこしにて、戎といふ文字、から國といふによく當れり。又漢をも、唐をも、韓をも、からとよむは、これらも皆、西なる國なればなり。〇つくらせりけむは、造り給へるならむといふことなり。〇もろ〳〵のから國は、その出來はじめ、物にも見えねど、上の歌に引いでたる、古事記の文をはじめ、此少名毘古那神の、とこよの國に渡り給ひしこと、日本紀に、其後少彦名命、行二至熊野之御碕一、遂適二於常世鄉一矣、亦曰、至二淡島一而緣二粟莖

者、則彈渡而至二常世郷一、また伯耆國風土記に、相見郡郡家西北有二餘戸里一、有二粟島一、少日子命蒔レ粟、莠實離々々、卽載レ粟彈渡二常世國一、故云二粟島一也、などあれば、まことに、から國どもは皆、此神ぞ經營し給ひつらんと思はるゝなり。〇一首の意明らけし。

物みなはかはりゆけどもあきつ神わが大君の御代はとこしへ

〇もの皆とは、世の中にあらゆる、萬の物皆といふなり。〇あきつ神は、現神とかきて、御代々々の天皇を申す。天皇は、すなはち神にてましませば、現在の神とまうすことにて、わが大君と申す詞に、かうふらせいふ詞なり。古き宣命の詞に、現神御宇天皇詔旨云々などあり。〇とこしへは、いつまでもかはらぬことなり。〇一首の意、萬の物皆は、世を經てうつろひ變りゆけども、わが天皇の皇統は、常しへに、かはらせ給ふことなしとよめるなり。

くに〳〵の君はかはれど高光るわが日の御子の御代はかはらず

〇國々の君とは、海外の異國どもの王をいふなり。まづ近くはもろこしのから國は、いにしへよりよろづたらはぬ事なく、餘の外國にくらぶれば、よき國なれども、いにしへより國の主さだまらず、しば〳〵代の易れるを思へば、その餘の國々もみな、同じことゝしらる。〇高光る日の御子と申すこと、上にいへり。皇國の君は、天地のかぎりを照し給ふ、天照大御神の皇統にましますが故に、てんちのあらむかぎり、かはらせ給ふことなきなり。

天てるや月日のかげをしる國は本つ御國につかへざらめや

○天照るとは、御空をてり渡り給ふことなり。高光ると全く同意なり。○月日の影をしる國とは、月日の光を蒙りて、そのかたじけなき德を、しる國はといふなり。○もとつ御國とは、その月日の神の生出たまへる御本國にて、卽この御國をいふなり。○つかへざらめやは、臣と稱してしたがふべき物ぞとなり。古事記に、息長帶日賣命の、韓國をうちたまひける時に、於是其國王畏惶奏言、自今以後、隨二天皇命一而爲二御馬甘一、每年、雙レ船、不レ乾二船腹一、不レ乾二施梶一、共與二天地一無レ退仕奉とあり。日本紀には、此事ことに委しく記されたり。萬國の王どもゝ皆、この新羅王の如くあるべき事なり。○一首の意、日月の尊くかたじけなき、御かげをしる國は、この本つ御國に、仕へぬいふことは、あるまじきことわりぞとなり。

もろ〳〵のから國人も日の神のひかりしえずはいかにかもせむ

○上の歌、また次々のをも合せて心得べし。○光しのしは、助辭なり。○下の句の意、この大御神の御光を蒙らずは、何とかすべきとなり。

さかしらに言擧はすれどから國もひるめの神のてらす國內を

○さかしらは、かしこだてなり。○言擧は、物を議論することなり。あげつらふといふも同意にて、いひたつるといふことなり。○ひるめの神は、日の大御神の御名なり。○國內は、字の

如くにてくぬちとよむなり。○はてのをは、なる物をといふ意なり。○一首の意、もろ〳〵のから國は、各さま〴〵に物の道理などを、賢げにこちたく言たつれども、その國々もこと〴〵く、日の大御神の照し給ふ内の國なる物を、此日の大御神の道を知らざるはいかにぞとふくめたるなり。

皇神の道しらねこそ言さへぐから國人はさかしらすなれ

○すめ神とは、神を尊みて申すなり。皇統の神をのみ申すといふ説あれども、然らず。○道しらねこそは、道を知らねばこそといふことなり。○さかしらすなれは、から國人は、測りても、測りしられぬ、天地の間の事どもをば、理を以ていとよく知りがほに論ずるをいふなり。○一首の意、神の道の實の傳へを知ねばこそ、から國人は己が私の智を以て、さま〴〵賢げにいふなれ。皇神のまことの道を知らば、その賢げにいへる事どもの、ひがことあることは、しらん物ぞとなり。

天しるや日の大神の道をおきてよこさの道にまどふよのひと

○天しるやとは、日の大神の天をしろしめすをいふ。○道をおきてはさし置てなり。○よこさの道とは、橫樣の道といふことにて、神の道の外に、おの〳〵一家をなしたる道々をいふなり。そは神の道の正しく直きにむかへて、正しからず直からざる故に、よこさの道といへるなり。

○まどふ世の人とは、正しく直き神の道のあるを、その道をさしおきて、正しからず直からざる異國の道々に、まどふ事よとなり。○日の大神の道とは、御國の正しき道をいふ。かの初めつかたなる歌どもに、道は此道とある道なり。此歌かの歌どもと合せて心得べし。

明らけき日の大神の道しらぬからのさかしらきゝたつなゆめ

○明らけきは、日といふもじにはかゝはらず、道といふへかけて心得べし。日の大神の道は、から國のさかしらにまうけ出たる道の如く、をぐらき所なき道なれば、明らけきといふなり。○きゝたつなゆめ、此句のこと師のいはく、こは萬葉四の卷に、汝乎與和乎、人曾離奈流、乞吾君、人之中言、聞起名湯目、とあるによりてよめるを、後によく思へば、かの起の字は、超の誤にて、聞超名湯目なり。十一卷にも有超名湯目とかけり。然ればこゝも、聽許須那由米と改むべきなりといはれたり。聽入信用することなかれといふことなり。○一首の意、日の大神の明らけき道をしらざる、から人のさかしらごとをば、ゆめ〳〵聽いることなかれとなり。外國はかみ代のつたへなけれこそまことの道をしらずありけれ

○とつくには、字の如く外國なり。○なけれこそは、無ければこそなり。御國ならぬ外國は、すべていづれにも、神代のつたへ說の無き故に、正實の道をばしらずして、さま〴〵私の賢げなる、さかしら說をいふなりとよめるなり。次の歌あはせて心得べし。

くに〳〵に傳はあれど日の本に本のまことのことはつたはる

○外國にも、それ〳〵上代よりいひ傳へたる說はあるなり。もろこしの國にては、盤古氏の左右の眼、日月となるといひ、或は女媧氏、五色の石をねりて、天地の缺たるを補へりといふたぐひ、また天竺にて、佛の經論どもに、さま〴〵の事どもをいへる中にも、その國の上代よりのいひ傳へとおぼしき事どもゝあるなど、猶その餘の國々にも、おの〳〵かたりつたへたる事あるべし。しかれども、もろ〳〵の外國どもの、さやうの傳說は、皆正しからずまことにあらず。たゞ正しき實の根本の傳說は、日の大御神の御本國なる、此御國にこそつたはりたれとなり、その正しき實の傳說といふは、古事記の上卷、日本紀の神代卷にしるされたる事ども是なり。上つ代のかたちよく見よいそのかみ古事ぶみはまそみのかゞみ

○形とは、ありさまといふに同じ。○石上は、古といふことの枕詞なり、○まそみの鏡は、まそかゞみといふに同じ、人の形などの、鏡の面にうつりて、あり〳〵と見ゆるが如く、古事記を見れば、上代のありさまの、まさしく見えしらるゝをたとへていへるなり。ふることぶみは、古事記なり。此記はもと、天武天皇の大御口づから、天地の始より、天つ日嗣の御代繼のありさまなどの、古事を、稗田阿禮といふ人の、わかきほどに、いひをしへさせ給ひて、口によみうかべしめたまひつるを、元明天皇の御代和銅四年に、その稗田阿禮といふ人の、口に空によ

みつゝ、おぼえたるまゝを、太朝臣安萬侶といふ博士に、書しるさしめ給へるなり。日本紀は、文章、漢籍のふりをしひてまねたれば、古意にたがへることゞも多くまじれるを、この古事記は、御國言辭のまゝに、ありのまゝをしるして、いと正しき書になんありける。故に此書をよく見よとなり。

まつぶさにいかでしらましにしへをやまと御書の世になかりせば

○まつぶさは、具にといふなり。まの字を添るは、古言のつねなり。○いかでしらましは、何として知べきぞとなり。○やまとみふみは、日本紀なり。日本紀は、元正天皇養老四年、舍人親王、勅命を奉りたまひて、撰錄し給へるなり。上代の古事どもつぶさにしるし給ひて、古事記よりは、こよなく廣く、詳なり。上代のありさまを、こまかに知べきは、此日本紀なり。されば此御書の、世にある事は、いと〳〵尊きなり。○一首の意、句の次第を置かへて、四五三一二として心得べし。

神の代の事ら〳〵傳へ來てしるせる御書見ればたふとし

○事らは、事どもなり。○こと〳〵は、盡なり。○つたへ來ては、神代よりいひ傳へ語りつたへ來てなり。○しるせる御書は、そのいひつたへ語り傳へ來たる事等を、錄せるなり。御ふみは、是は古事記日本紀を合せていふなり。○一首の意、神代の事どもを、その傳へのまゝにこ

と〳〵く記錄したる、この御書どもを見れば尊しとなり。

まそ鏡見むと思はゞからことの塵ゐくもれり磨てしよけむ

○上の歌によりて、日本紀古事記をさして、まそ鏡とよみなせるなり。まそ鏡は、萬葉の古歌どもに、つねによめるは、たゞ見といふ枕詞におきたるを、こゝにては、然らず、二の御書をたとへて、鏡といへるなり。○からことの塵ゐくもれりとは、代々の識者の、二書を注釋したるは、漢籍の意義をもて、神代の事等を、或は陰陽五行などに配當し、或は天上の事は、倭の都にてありし事とし、又海神宮の事を、對馬國なりとも、琉球國なりともいへるたぐひ、其外の事等にも、皆漢意を以て解る故に、實の意はかくれて顯れざること、たとへば鏡に塵のかゝりてくもれるが如くなるをいふなり。さればその漢意の說を、とりすて磨みがきて、古意をまさしく見出づべしとなり。○磨てしよけむは、磨て見るがよからむぞとなり。磨てしのしは助辭なり。

しるべすと醜のものしりなか〳〵によこさのみちに人まどはすも

○しるべすとは、しるべをするとてなり、汝へ道引をいふなり。○醜のものしり、物知りは、今の俗にいふも同じく、識者をいふ。醜は、萬葉集中に、しこのしこ草、しこほとゝぎすなど多くよみたる、みなその物を、にくみきらひていふ詞なり。○なか〳〵には、なまじひと同意

なり。俗にはなまなかといふ。○人まどはすもは、もは、輕くこゝろうべし。よなどいふ意なり。萬葉集中に、鶯なくもなど多くあり。人を惑はすとは、外國の道々の書の意もて、御國の古書の注釋をなして、教へ道引て、人を惑はすなり。○一首の意、しるべをすとて、わろき物知り人等が、なまじひに、横さまの道にをしへおもむけて、人を惑はすよとなり。

さかしらに神代の御書ときまげて漢のこゝろになすが悲しさ

○さかしらは、上に出たり。○ときまげては、文義のまゝに、眞直には說かずして、漢籍どもの意を以て、牽强附會して、横様に枉げてとくをいふなり。○漢のこゝろになすがかなしさは、神代の古事どもを、漢意にとりなすを、深く歎けるなり。○一首の意、代々の注者、さかしら心にて、神代の御書の、古傳說をば、强て漢籍の意義に說き枉げて、皇國の古意をうしなふが悲しとなり。

からごゝろなしと思へど書らよむ人のこゝろはなほぞからなる

○書等は、もろ〳〵の書籍なり。○猶ぞからなるとは、書どもを讀むほどの人は、われはからごゝろなしと思へども、やつはりから意なりといふなり。そも〳〵歌よみ、或は古學するひとの、やゝ古書の義を會得して、われは漢國風は信ぜず、漢意なしとおもへる人も、なほ漢意の習染ははなれがたきなり。學問する人は、十人が九人までは漢意なり。たとへば、わが國は神

國にて、皇統のとこしなへにつゞき給ひ、稻穀の殊に美好なるなど、いと〳〵尊き國なり。から國どもは、風土あしく、人心さかしだちて、いやしき國なりなどまでは、わきまへながら、神代のありさまの奇異なる事どもを記せるを見ては、猶とやかくやとうたがひまどひて、高天の原の事、夜見の國の事、綿津見の宮の事、また今目のあたり天てらす日は、伊邪那岐命の御禊によりて出生ませる天照大御神なること、又たゞ今天下しろしめす天皇は、すなはちあまてらす大御神の御子孫なることをば、猶疑ふたぐひあらん。これみな漢意のはなれぬ故なり。道にこゝろざしあらむともがらは、よく〳〵おのが心をかへり見て、漢意をはらひ清むべし。これ古學の緊要なり。

からごころなほしたまへと大直毘神のなほびをこひのみまつれ

○大なほび神の直びは、大直びのと、のをそへて心得べし、古事記に、伊邪那岐命の御禊の段に、次爲レ直二其禍一而、所レ成神名、神直毘神、次大直毘神、次伊豆能賣神とあり。世中のよろづの、あしき事を、吉に直し給ふ神なり。されば人の心に染みつきて、離れがたく退りがたき、漢意を直し給へと、大直毘神のなほびを、こひ願ひ奉れとなり。直毘をこひのむとは、物直し給ふ御靈を祈りねがふなり。

伊豆のめのいづのみたまを得てしあらばからのまがれる事さとりてん

○いづのめは、上の注に引出たる、伊豆能賣神なり。○いづの御靈は、清淨明白なる神靈をいふなり。○えてしあらばは、しは助辭にて、得たらばなり。○からのまがれる事とは、漢意の直からず、物を強たることをいふなり。○一首の意、直毘神に祈り願ひて、その直毘の神靈によりて、伊豆能賣神の清淨なる御靈を得たらん物ならば、その時ぞ、漢意のわろき事をばさとるべきとなり。

久方の天つ月日の影は見じからのこゝろの雲し晴ずは

○ひさかたは、天の枕詞なり。○雲しのしは助辭なり。○一首の意、雲霧におほはれては、天つ月日の影の見えがたきが如く、漢意にうばゝれては、皇國の明らけき、古傳説の意を、えわきまへさとらじといふたとへなり。四の句にて、そのたとへのこゝろをしらせたり。

からぶみのさぎりいふせみしなとべの神のいぶきの風まつわれは

○さぎりは、たゞ霧なり。○さはまと同じく、そへいふ詞なり。○いふせみは、雲霧の氤氳とおほへるが、もやゝゝとしてうつとしさにといふなり。○しなとべの神は、古事記に、風神志那都比古神、日本紀に、伊弉諾尊、曰、我所生之國唯有朝霧而薫滿之哉、乃吹撥之、氣化爲神、號曰級長戸邊命、亦曰級長津彦命、是風神也とあり。○神のいぶきの風とは、風はみな、しなとの神の息吹なればいふ。大祓の詞に、科戸之風乃、天之八重雲乎、吹放事之如久、朝之御霧、

夕之御霧乎、朝風、夕風乃、吹掃事之如　などあり。〇一首の意、からぶみの説、天下にみちひろごりて、雲霧のごとくおほへるが、いふせくわづらはしきによりて、われは神の息吹の風をまつとなり。神の御息もて、うるさきからぶみの説どもを、ふきはらひ給はむことを、まつなり。

下にごるから書川はとこなめのかしこき川ぞあしふむなゆめ

〇したにごるは、うはべは澄たるやうにて、底のにごれるなり。〇からぶみ川とは、漢籍を、川にたとへていふなり。〇とこなめは、川の底なる石に、なめらかなる苔のごとき物の、あるをいふなり。かしこき川は、おそろしき川なり。足ふむなゆめとは、ゆめゆめ、そのとこなめを、ふむことなかれとなり。そも〳〵、漢籍といふ物は、うはべは、文章うるはしくて、見事に見ゆれども、實は、直からずしひたることおほく、又うはべをかざりて、内心には、邪曲をいだける事おほし。されば、見る人の心まで、おのづからそれにうつりて、邪智を生ずるなり。それを、下にごれる川の常滑を、ふみてすべりて、水中にたふるゝにたとへたるなり。萬葉十一に、こもりくの、豐泊瀬道は、常滑の、恐きみちぞ、こふらくはゆめ。此歌の姿詞をうつされたり。〇一首の意、漢籍川は、下にごりて、常滑にすべりたふるゝ、おそろしき川ぞ、心せよ、清き川ぞとおもひて、ゆめ〳〵あやまちすなとなり。

きもむかふ心さくじりなか〳〵にからの教ぞ人あしくする

○きもむかふは、こゝろの枕詞なり。○さくじりは、こざかしくて、大やうならぬをいふなり。俗にこましやくれといふにおなじ。○なか〳〵には、なまじひになり。漢の教てふ物は、人をよき方に道引くべくたてたる物なれども、あまりに瑣細に物を議論し、理非をきはやかにし、私智をふるふからに、人よりはわれ賢こからんと、あらそひて、かへりて人の心をあしくすとなり。

みくにはし日の神國と人くさの心もなほしおこなひもよし

○みくにはしのしは助辭なり。○日の神國は、日の神の生出たまへる御國なり。とはとての意味なり。人草は、上に出たり。○漢くになどは、人の心姦邪にして、その行ひ、正しからず。御國はもと人民の心直くして、おこなひも正しかりしなり。中にはあしき行ひする者も、なきにはあらざりしかども、漢國にくらべては、いと〳〵まれにて、又その暴悪も淺く直かりしなり。

からざまのさかしら心うつりてぞ世人のこゝろあしくなりぬる

○上代の人の心直く正しくして、萬の事穏かに安らかなりつるを、漢國より書籍のわたりまゐり來て、それをよみ習ひ學ぶことはじまり、やう〳〵に盛になりゆき、天の下にひろごりわた

り、上下こぞりて、かの國のしわざを、まねびならふから、おのづから、人の心も、おこなひも、その漢國のさかしきにうつり來て、數百年の世をふるまゝに、かの惡風俗の染習して、世人の心、いにしへには大にかはりぬるなり。

日の本のやまとをおきてとつ國にむかる心はなにのこゝろぞ

○日の本は、枕詞ながら、日の大御神の御本國といふ意をも、ふくめておかれたりと見ゆ。○とつ國は、上にいへり。○むかる心は、あふぎ向ふ心にて、佛者のいふ、歸依の意なり。萬葉に、むかしくもあるかなどもよめり。敵となりて向ふにはあらず。さて此詞は、萬葉の東歌に、つくしべに、敵卒加流布禰乃といへる、むかるに同じ。世の人、外國の王を、天子といひて、尊き物に思ひ、その國を、中華中國などいひて、御國をば、いやしめて、みづから、東夷ぞなどゝいふたぐひさへある、これ外國にむかる心なり。○一首の意、日の本のこの尊き御國をさしおきて、いやしき漢國をあふぎ尊む心は、いかなる心ぞとなり。

言擧せぬ國にはあれどもまがことのことあげこちたみ言擧すわは

○言擧とは、物を論じていひたつることなり。ことあげせぬ國とは、何も物をかしかましくろんじ、いひたつることなき國といふなり。○まがことの言擧は、道の害になる、邪僻の諸說をいふなり。又儒者などの、ひたすら皇國を貶しめ、神をかろしめ、天皇をたやすく申し奉りな

どするも、みな道にそむける、枉説なり。○こちたみは、言痛と書て、好ましからぬ事のあやにくにしげきやうの事をいふ詞なり。こちたみのみは、こちたさにといふ意なり。俗にいはゞ、うるさゝになどいふが如し。○ことあげすわは、論辨す、われはなり。萬葉十三、蜻島、倭之國者、神柄跡、言擧不爲國、雖然、吾者事上爲、天地之、神毛甚、吾念心、不知哉、云々また葦原、水穗國者、神在隨、事擧不爲國、雖然、辭擧叙吾爲、云々などあり。○一首の意、皇國は、物をこちたく論することなき國なれども、邪説の論が、あまりやかましう、うるさゝに、やむこと得ず論辨すとなり。此百首の歌ども、すなはちこの言擧なり。

まがつひは世人の耳かふたぐらむ眞事かたればきく人のなき

○まがつびは、古事記に、伊邪那岐命の御禊の段に、初於中瀨墮迦豆伎而滌時、所成神名、八十禍津日神、次大禍津日神、此二神者、所到其穢繁國之時因汚垢而、所成之神者也と見えて、かの黄泉のけがれより、生出給へる神にて、世のなかの凶悪は、みな此神のなし給ふなり。○世人の耳かふたぐらむとは、世上の人の耳を、塞ぎたまふかしてといふなり。耳をふたぐとは、聞人のなきといふにつけての詞のみにて、意はたゞ此神のさまたげて、きゝ入れさせぬやうにし給ふかといふことなり。まことに世の人の、古學の尊きことを聞いれぬは、此神のさまたげ給ふなり。○眞事かたればは、神代の古傳のまゝに、眞實の意をかたりきかす

ればなり。○さるは、世の物しり人の、神代の書をとくに、漢意を附會して、解き聞すに對して、さやうのつけそへごとなく、古傳のありのまゝに、解きゝかす、といふことなり。○禍津日いのいは、人の名などの下に附ていふこと、古言に多くあることなり。某よとよび出る意もあるなり。續日本紀の宣命におほし。萬葉集にもあり。○一首の意、禍津日神の、世人の耳を、塞ぎたまふやらむ。神代の眞實をかたりきかすれば、きゝいるゝ人のなきとなり。

あやしきはこれの天地うべな〳〵神代はことにあやしくありけむ

○これのとは、此といふに同じ。○うべな〳〵は、諸の字にて心得べし。俗に、なるほどげに〳〵といふ意なり。○よにあやしき物は、この天地なり。いま現に、かく奇々妙々なる天地なれば、此天地の出來はじまる神代は、又ことに奇々妙々なること多かりけんも、げにことわりなりといふなり。○あやしくありけむは、俗にいはゞ、あやしく有たであらうといふ意なり。さてかくよめるは、世の人の、神代のさま〴〵のあやしき事どもを、有まじき事と思ひて、うたがふ故に、さやうに疑ふは、かへりて愚なることゝいふ意を、さとしたるものなり。

しらゆべき物ならなくに世の中のくしきことわり神ならずして

○しらゆべきは、しらるべきといふに同じ。○くしきことわりは、奇妙なる道理なり。神代の事よりはじめて、すべてこの世間の理といふ物は、いと〳〵奇妙なる物にて、いかにとも、人

の小量なる智にてはしられぬなり。○結句は、神ならずしては、しらるべきにあらずと、上へかへる詞なり。

しるといふはたれのしれものはかりても世のことわりは底ひなき物

○しるといふは、たれのしれものといふは、知て居るといふは、何といふ愚癡の人ぞといふ意なり。しれものは、癡人といふことなり。たれとは、尤めていふ詞なり。○はかりてもは、いかほど工夫し考へてもなり。○世のことわりは、上の歌に、くしき理とあるを合せて、くしき世の道理はと心得べし。○そこひなきものは、限りなき物ぞといふに同じ。かくよめるは、己が智慧を以て、世の中の理を、測りしらむとすることの、愚なるをいふなり。

くすはしきことわりしらずて漢人の物のことわりとくがはかなさ

○くすはしきは、くすしき、くしきなどいふみな同言にて、奇妙なる意なり。○ことわりしらずては、天地の間の事は、すべて奇妙なる理ある事をばしらずして、かしこげに物のことわりをとくは、はかなく愚なることぞとなり。

あやしきをあらじといふは世の中のあやしきしらぬしれ心かも

○神代のさま〴〵のあやしき事などを、から心の人は、神代とても、さやうにあやしきことにてはあらじと疑ひ、すべて世にあやしき事は、無き理なりと言ふは、いとあやしき此世間に在

りながら、そのあやしきをしらざるからの、愚なる心ぞとなり。○しれ心は、癡心なり。そも〳〵この世間の事は、人の、目にて物を見、口にて物をいひ、耳にて物をきゝ、手足の物とり道ゆくやうの事までも、一つとしてあやしからぬはなきを、それをしらずして、世のあやしき事はなき理なりと思ふは、まことにしれごゝろなり。

さかしけど人のさとりはかきりあるを神代のしわざいかではからむ

○さかしけどは、賢しけれどゝいふことなり。さかしは、賢きなり。人の智といふ物は、何ほど賢くても、限りある物なれば、神代のしわざの、奇妙靈異なる理は、いかでよく測りしらんとなり。

人みなの物のことわりかにかくに思ひはかりていふはからこと

○人みなは、皆人といふに同じ。○かにかくには、とやかくやといふに同じ。○からことは、漢流の説をいふなり。世の人、何事につけても、それはかやうの理にて、しかり、これは、かやうの理にて、然りと、まづその理を、とやかく也とさだめいふ。そはみな漢國の風俗にて、から説なり。すべてのこと、その理は實はしれぬことなれば、大やうにて、何となく心得おくぞ、御國のいにしへの意なりける。

つたへなき事はしるべきよしもなししらえぬことは知ずてをあらん

○しらえぬは、不所知にて、知られぬといふことなり。○すべて、神代よりの傳說ありて、古書に見えたる事は、その說の如く、心得べけれど、傳へなくして、古書に見えぬ事は、いかにとも知るべきよしなきなり。然るを、そのしりがたき事をも、しひてしりがほにいふは、例のから風なり。○をあらむのをは、助辭のごとく、そへいふ詞なり。

つたへはしなくとも似たるたぐひあらば外になぞへてしることもあらむ

○傳へはしのしは、助辭なり。○なぞへは、なぞらへなり。○上の歌につゞけて心得べし。○古事記、日本紀、その外の古書にも、たしかにつたはらぬ事も、大かたよく似たる事あれば、それに准らへて、しるべき事もあるべしとなり。此歌などは、古書を考へとくためのをしへなり。

世のなかのあるおもぶきは何事も神代のあとを尋ねてしらゆ

○あるおもぶきは、萬の事のありさまをいふなり。○神代の跡は、事跡なり。○たづねてしらゆは、神代にありし跡を、尋ねてしらるとなり。すべて世のなかの事は、國の治亂盛衰、人の吉凶禍福、その外よろづの事の、斂道はこび、皆神代にありし事跡の趣に、全く同じくしてかはることなし。然れば、世間の萬の事の斂みち運びを知むとおもはゞ、神代の事跡の、おもぶきはこびを考へて、しれとなり。

もろ〳〵のなりづるもとは神むすびたかみむすびの神のむすびぞ

○なりづるもとは、成出る源なり、人類の生れいづる事、萬物の出來ること、萬事のいでくる事などをいふ。○神産巣日、高御産巣日神とは、古事記に、天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神、次高御産巣日神、次神産巣日神とあり。物を生ずしむる靈の神なれば、かく御名つき給へるなり。むすは、苔のむすなどいふむすにて、物の生ずるをいふ言なり。神代のはじめにあらはれ給へる神にて、世の中にあらゆる事のおこりは、みな此二神の御靈によりて、成出るなり。その物を生じ給ふ神靈をさして、むすびといふなり、日本紀に、産靈と書れたり。

あらはにの事は大きみかみごとは大國主のかみのみこゝろ

○日本紀に、大國主命の、この葦原の水穗の國を、天つ神の御子に、避奉りたまひし時の、御詞に、吾所治顯露事者、皇孫當治、吾將退治幽事一とあり。○あらはにの事とは、現在世人のなすわざをいふ。さて別に、誰がなすわざともしられずして、世におこなはるゝ事を、かみ事といふ。人の生死禍福、國の治亂吉凶などのたぐひなり。○あらはにの事は大君とは、現在人のなすわざは、天皇のしろしめすよしなり。天皇の、この天下を治めたまひ、萬の事をまつりごち給ふ、これ顯露事なり。○かみごとは大國主の神の御こゝろとは、かの誰がなすわ

ざともしられずして世にある事は、みな大國主の神の御心もて行ひ給ふなり。〇一首の意、あらはにの事は、天皇のしろしめす事ぞ。目に見えぬ神事は、大國主神の御心より、おこるものぞとよめるなり。

目に見えぬ神のこゝろのかみごとはかしこき物ぞおほにな思ひそ

〇神の心のかみごととは、上の歌なる、大國主神の御心もて行ひ給ふかみ事をいふ。そは、誰がなすわざと、あらはにはしれぬことなる故に、目に見えぬといふなり。かみごとを、日本紀に、幽事とかゝれたり。〇かしこき物ぞは、おそるべき事ぞとなり。〇おほにな思ひそは、おろそかに思ふなといふなり。〇一首の意、目に見えぬ神の御しわざは、一きはことにおそろしき物なり。おろそかに思ふべからずとなり。しかるに、後世の人は、みな漢意にて、物の理窟をのみいひて、神事のおそろしきことをしらざるは、いとかなしきわざなり。

世のなかのよきもあしきもことごとに神のこゝろのしわざにぞある

〇世間に、吉事の出くるも、凶事の出來るも、皆ことごとくに神の御心よりおこりて、しかせしめたまふぞとなり。おそるべきことなり。

よきことにまがごといつぎまがことはよき事いつぐ世のなかの道

〇よき事は、吉事なり。〇まがことは、凶事なり。〇いつぎは、繼といふ言に、いもじをそへ

たるなり。葛葉に、いつぎ〳〵とあり。○世のなかの道、この道といふも、かのはじめかつたの歌に、道はこの道とあるに同じ。○一首の意、世間（ヨノナカ）のありさまをよめるなり。まづ神代の事の次第、すべて吉事より悪事出來、また悪事より吉事になるなり。さて人の代となりても、代代に吉事凶事のかはる〳〵はこびゆく次第も、神代の事の如く、此理にたがふといふことなし。

世のなかはよごとまがことゆきかはる中よぞちゞの事はなりづる

○よごとは、吉事なり。○中よぞとは、中よりぞといふことなり。よりをよともゆともいふなり。○ちゞのは、さま〴〵のなり。○なりづるは、成出（ナリイヅ）るなり。吉事と凶事と、ゆきかはりゆきかはりする中より、世の事どもは、何事も出くるぞとなり。たとへば、年のうち、寒暑溫涼の往來する間に、田穀も草木も生育するが如し。

ことわりのまゝにもあらずてよこさまのよきもあしきも神の心ぞ

○横様（ヨコサマ）のよきあしきといふは、あるべき當然の理にたがひて、吉事もあり、又理にたがひて、凶事もあるをいふなり。たとへば、善人の禍にあひ、悪人の福を得るたぐひなり。禍福のこと、すべて道理のごとくにはあらで、思ひの外なる物なり。かくはあるまじき理ぞと思へども、それも、神の御心（ミココロ）より出くることなれば、あらそひがたし。そはよき神の、然せんとおぼす事も、その神の御心にも叶はず、他のあしき神のみこゝろなどに、まけたまふこともあるゆゑなり。

もゝたらず八十まがつひのまがことゝよきをきらへよき人よくせぬ

○もゝたらずは、八十といふ枕詞なり。八十とは、數の多きをいふ。○まがことゝのとは、てといふ意なり。○よきをきらへやは、吉事を嫌へばにやといふなり。○よき人よくせぬは、善人を吉せぬなり。よに善事をなす人には、萬の禍きたりて、富貴安樂なるべきを、その道理にはゆかず、善人も不幸貧窮のみにてあるなどは、みな禍津日神の御しわざなり。又これに准じて、惡人の福あるも、此神の御しわざなる事をしるべし。○一首の意、禍津日神の禍わざとて、世上の吉事をきらひ給へばにや。よに善事をなすよき人を、よくもあらしめぬとよめるなり。

よき人をよにくるしむる禍津日の神のこゝろのすべもすべなさ

○世にくるしむるのよには、詞なり。世にもかなしく、よにもうれしくなどそへいひてその事の意を深くする詞なり。○すべもすべなさは、すべなきは、何とも爲べきてだてもなきをいふなり。二つかさねいふは、つよくいふなり。そも〳〵儒佛などの教には善を行ふ人には、福祐をあたへ、榮えしむるやうにいへれども、その理のごとくにはあらぬ物なり。これ世の中の事は、みな神の御しわざにて、神には善神惡神のまし〳〵て、世の中の事をも、人の身の上をも、はからひ行ひたまふ物なればなり。

天てらす大御神すら千早ぶる神のすさびはかしこみましき

○天照大御神すらのすらは、大御神でも、大御かみさへなどいふが如し。千早ぶるは、いちはやぶるにて、荒ぶることなり。○神のすさびは、あらびて悪行をなし給ふをいふなり。こゝは須佐之男神のすさび、あらび給ひて、さま〴〵の悪行をせさせ給ひし事なり。○かしこみましきは、おそれ給ひしなり。須佐之男神のあらび給ひしには、世に又なく尊き、天照大御神すら、何ともせさせたまふべきすべなくて、おそれて、天の岩屋にさしこもり給ひしなり。此段神代の、磐屋戸のくだりにありて、古事記傳にくはしくときおかれたり。ひらき見て知べし。これば、善神の御心には、善人をよくし、悪き人を凶くせんとおぼしめしても、悪神のあらび盛なれば、善神の御心にも任せ給ふことあたはず、故に世の中には、理にかなはざる吉凶のあるなり。これ尋常の理を以てはいひがたきことなり。

おふけなく人のいやしき力もて神のなすわざあらそひえめや

○おふけなくは、力に應ぜぬ、重き物を負持んとする如く、己が分際に過たることをするをいふ、俗に大膽などいふ意なり。神は尊きもの、人は卑きものなるに、そのいやしき人の分際として、神の御しわざに押勝んとあらそふ、これ眞氣無きなり。○あらそひえめやは、爭ひ得べからずといふ意なり。○一首の意、人たるものゝ、わづかなる力をもて、おふけなくも、神の

御しわざに、勝んとあらそふとも、つひにあらそひ得じとなり。これから意の人の、己が理窟をたてゝ、神の御しわざに、勝んとするを、いましむるこゝろなり。

あぢきなき何のさかしらたまぢはふ神いつかずておほろかにして

○あぢきなきは、無益といふことなり。○さかしらは、賢だてをすることなり。○たまぢはふは、神の枕詞なり、千早振といふとは、反對にて、ちはやぶるは、神のあらび給ふかた、これは、神の靈の、人に幸ひし給ふことをいふなり。古今集このかたの歌には、神といふ枕詞には、たゞ千早ぶるとのみいへれども、いにしへは、靈治波布ともいへるなり。○神いつかずて、いつくとは、祭祀にて、重じうやまふことなり。○おほろかにしては、おろそかにしてといふに同じ。世には賢だてをして、わが心だに正しく、正直なれば、神は見通しにしろしめす道理なれば、あながちに、祭り祈らずとても、神の加護はあるなりといひて、神を重んじ敬ふこともせず、なほざりにし奉るものもあるなり。そはみなさかしら心より出くることにて、いとあぢきなく、あるまじきことなり。されば、それをいかなる心ぞやととがめたるなり。○一首の意、いつきうやまふべき神を、いつきうやまはずして、おろそかにして、たゞ己が理窟のかしこだてばかりをするは、何事ぞ、無益の賢だてかなといふ心なり。

いざ子どもさかしらせずて靈ぢはふ神の御しわざたすけまつろへ

○いざ子等とは、人々を率ひたつる詞なり。子どもとは、小兒をさしていふにあらず。門人從者などのやうの、己が率る者をさしていふなり。萬葉にも、古事記、日本紀の歌にも、多くよめる詞なり。○助けまつろへ、助とは、神の御しわざを、ともゞ〳〵力をそへて、助奉るなり。たとへば、神の人に幸をあたへ給ふやうの事を、我もともゞ〳〵力をそへて、その事を助けなすやうの意なり。まつろへは、まつれなり。したがひ仕ふるをいふなり。○一首の意、人々賢だてをやめて、神の御心にしたがひ、神の御しわざを、助け仕へまつれと、人をすゝめいざなへるなり。

をぢなきがまくる思ひて神といへど人にかたずといふがおろかさ

○をぢなきは、弱く拙くいやしきやうの意なり。こゝは、をぢなき神をいふなり。○まくる思ひては、そのをぢなき神の、たまたま人に負たまふことのあるを思ひてなり。そもゞ〳〵神は大かたは尊くおそろしき物なれども、中にはよわく、微しき神もあれば、よに心たけく剛強なる人は、その神をも、何とも思はぬに、たまゞ〳〵かのをぢなき神は、さる剛強なる者には、まけて、え祟りなどもせぬ事のあるは、神の中にも、弱く拙く微しき神なればなり。○一首の意、よわくつたなき神の、事によりては、人にもえ勝たまはぬことのあるを、手本にして、惣體神といへども、人に勝ことあたはずと、思ひさだむるは、神にも、尊卑強弱のあることを、わき

まへぬ、愚なる心なりとよめるなり。以上四首は、例のから風の理窟をいましめたる歌なり。

神といへばみなひとしくや思ふらん鳥なるもあり虫なるもあり

○一首の意、神といへば、いづれの神も皆同じことに思へるか、そはひがことなり。神にはさまざまありて、鳥なる神も、虫なる神もありて、品々のあることぞとなり。猶次の歌に合せていふべし。

いやしけどいかづちこたまきつねとら龍のたぐひも神のかたはし

○鳥獣虫魚のたぐひまでも、あやしくくすしき勢ひしわざある物は、みな神なり。○雷はもとより、鳴神とて神なり。○こたまは、和名鈔に、樹神ともかけり。俗にいふてんぐのことなり。天狗といふはもと星の名なれども、こゝにては俗にいふ天狗なり。また俗にこたまといふは、山中などにて、物のこゑのひゞきこたふるを、こたまといへど、それにはあらず、それはおかしは山彦といへり。又俗に、高神ともいへり。さて狐狸熊狼虎豹龍蛇の類みな神なり。虎を萬葉集に、韓國の虎ちふ神とよみ、日本紀欽明巻に、威神といへることもあり。狼をも同じ巻に、貴神とあり。又萬葉に、大口の眞神之原とよめる歌ども〻あるは、狼をいにしへ、眞神といへればなり。神代巻に、素戔嗚尊、蛇を、可畏之神とのたまへることもあり。これらみな神にはあれども、微しく劣れる神なり。○いやしけどは、賤しけれど〻いふことなり。○神のかたはし、今の俗にも、其の片端といふに同じ。（淸少納言枕双子にも、木のかたはしのやうにといふ詞あり。）神の中にも、いと賤しき神なる故に、片端といふなり。

さかくじも神にしあればその道も廣(ヒロ)けき神の道のえだみち

○さかは、釋迦、くじは、孔子なり。字音なれども、古代より世の人のつねにいひなれて、歌にも、物語ぶみにも、をり〳〵見えたり。釋迦は、佛道の元祖にて、はるかなる西の方の國に出たる人なれど、その道のひろく行れて、世人のあまねく尊信せらるゝは、すなはち神なり。孔子も、から國の人なれども、世人にすぐれたる人にて、代々の人にたふとまるゝは、すなはち神なり。神にしあればのし。は、助辭にて、神なればといふことなり。さてその儒佛の二道も、その神たる人の、敎へたる道なれば、卽これも神のみちのかたはしの枝道なり。廣けき神の道とは、かくの如く外の道々もいひもてゆけば、皆神の道の內なれば、神の道はいと廣きなり。

いつくべき神たちおきて外國(トツクニ)のけしき神をらいつくもろ人

○いつくとは、上にもいへる如く、祭祀崇敬することなり。○おきてはさしおきてなり。○外國(トツクニ)は、字の如し。上にもいへり。○けしきは、異の字を書て、御國の皇神たちとは、異なる神をいふ。そも〳〵、世の人、よしなき、外國の人、或は佛、菩薩などをのみ尊信して、いつき奉らではかなはぬ、己が國の皇神たちをば、さしおきて、まつらぬをいふなり。

玉鉾百首解下巻

たなつ物もゝの木草も天てらす日の大神のめぐみえてこそ

○稲穀は、いふもさらなり。野山に生たつ、もろ〳〵の木草まで、みな天つ日の御めぐみをかうふりて、成長蕃茂するなり。日影のあたらぬ、物の蔭などにては、何となき草も、え生さかえぬにてもしるべし。○めぐみ得てこそとこそにてとまりたるは、いひのこして、詞の外にこころありて、めぐみを得てこそ、成就して生榮ゆれといふなり。

朝よひに物くふごとに豐宇氣の神のめぐみをおもへよのひと

○朝よひは、朝夕なり。○豐宇氣神は、よにことにいつきまつるべき神なり。食物は、皆この大神の御靈によりて出くるなり。そもそも、朝夕の食物といふ物、よに絶えて無らんには、天のしたの、人の命は繼ぎがたきなり。命のなからんには、天下は常闇もひとしきなり。伊勢の外宮に、この大神をいつき奉るも、天照大御神の御心よりおこりて、大御神の宮ちかくましまさしめて、萬の神事も、大御神の宮にことならず、いつきまつらしめ給ふこと、大御神の、重くいつき祭らせたまふ御食神にましますゆゑなり。

天地の神のめぐみしなかりせば一日一夜もありえてましや

○神のめぐみしのしは、助辞なり。有得てましやは、あられはすまじといふことなり。人の世に在るほど、何事によらず、神の御惠にかゝらざる事は一つもなし。神の御蔭をかうふらでは、一日片時も、在得べからざるなり。さて上に、伊勢の兩宮の大神の事をあげて、次に此歌に、天地の神の云々とあるは、かのふた宮の外にも、必いつき奉らでは叶はぬ、神たちの、多くましますことを思はせたるなり。

八雲たつ出雲のかみをいかに思ふ大國主を人はしらずやも

○やくもたつは、出雲の枕詞なり。○出雲の神は、杵築大社なり。○大國主をとは、たゞ大國主命といふ御名をいへるのみにはあらず、これは葦原の中つ國、天下を、經營しうしはき領じましませし、國の主たる神なる物をといふ意なり。この大神の、國の主とましくけること、古事記日本紀にくはしく見えて、天下の人、みなこの恩頼を蒙り奉ることいふもさらなり。○人はしらずやもは、人はしらぬかといふ意にて、世の人々、かく尊くおもき神にてましますを、それともしらずにゐることかと、深くとがめたる詞なり。○一首の意、出雲大社の神をば、世の人々はいかに心得て居るぞ。此神は、天下を經營したまひ、領知し給ひし、國のあるじ、大國主命にましませば、天下の人、必いつき奉らでは叶はぬ神なる物を、それとはしらぬかとい

へるにて、世の人の、出雲の大社を、必ず敬し奉るべきことを、しらざることを、深く歎きてよまれたるなり。

いのちつぐくひ物きものすむ家ら君のめぐみぞ神のめぐみぞ

○いのちつぐは、命をつゞくるなり。○めぐみとは、御かげといはんが如し。神にもあれ、主君にもあれ、親にもあれ、上たる方より、下たる者を慈恵して、あたへ給ふ恩徳をいふなり。あたゝかに服、飽まで食ひ、雨露をおほひ、安く住み、やすく寐るは、人々おのが力もて、然ると思へるか。皆これ、天地の神のしからしめたまふなり。さて天下の萬民、君の御恵を蒙らざるはなし。又君とは、おの〳〵が、主君のことにもわたるべし。

天てらす神の御民ぞ御民らをおほろかにすなあづかれるひと

○天てらす神の御民ぞとは、天下の民百姓は、みな天照大御神の、御民百姓ぞとなり。○おほろかにすなは、疎略等閑にすることなかれとなり。おほろかは、おろそかといふに同じ。○あづかれる人とは、一國にもせよ、一郡にもせよ、一邑にもせよ、その民を治むる人をいふなり。民は、皆大御神の御民なる故に、それを、姑く預り居るなれば、あづかれる人といふなり。然れば、必私の民百姓と思ひて、おろそかにすなとなり。

物つくる民は御たからつくらずはいかにせんとか民くるしむる

○もの作る民とは、田畑に蒔生して五穀をつくる者また宮室器財布帛何にても、よろづの物を作りいだし、交易する工商などをもすべていふなり。古書ともに、百姓とかきても、民とかきても、みたからと訓たり。その農工商の、物作らざらんには、いかにともすべきかたなかるべし。○いかにせむとかは、何とせうとてかといふに同じ。○民くるしむるは、民は、わが領内の民なりと思ひて、心のまゝに、ひたすら苦むるをいふなり。

すめかみのめぐゝおもほす人草ぞよの中の人あしくすなゆめ

○すめ神とは、神を尊みて申すなり。○めぐゝは、めぐみと同言にて、めぐみは、體なり。めぐゝ思ふは、用なり。俗に、ふびんに、大せつに思ふといふが如し。萬葉十八に、妻子見れば、かなしくめぐしとあり。○人草は、上に注せり。萬民なり。よの中の人といふも、同じく萬民をいへるなり。○あしくすなは、賊害するのみならず、すべて、いさゝかにても、人のためにあしき事を、なすといふなり。○ゆめは、ゆめ〳〵なり。

世々のおやの御かげわするな代々のおやは己が氏神己が家の神

○代々の先祖は、すなはち我家の氏神ぞとなり。おの〳〵ほどほどに、家の業ありて、世を安くわたるは、みな先祖の御蔭なれば、その家々にとりては、神なり。先祖の御蔭は、一日も忘るまじきわざぞとなり。朝夕祀り奉りて、孝養をつくすべきなり。

父母はわが家の神わが神とこゝろつくしていつけ人の子

○人の子といふは、たゞ子といふに同じ。ふるき歌に、たゞ親のことをも、人のおやといひ、又千代もといのる人の子のためなどもいへり。これらの例なり。○一首の意、子たる者のためには、父母は、わが家の神なるぞよ、わが家の神とあふぎ奉りて、力のかぎり、心のかぎり、まめやかにいつき敬ひ奉れとなり。

ぬえ草のめこやつこらは皇神のさづけし寶うつくしみせよ

○ぬえくさは、妻の枕詞なり。○めこは、妻と、子となり。○やつこらは、奴婢なり。○うつくしみは、慈愛憐愍をいふなり。一首の意、妻も、子も、めしつかふ者も、みな皇神たちより、授けあたへ給ひたる、寶ぞよ、隨分にあはれみをかけて、大切にせよとなり。

かもかくも時のみのりにそむかぬぞ神のまことの道にはありける

○かくもかくもは、ともかくもといふに同じくて、こゝは、どうであらうがかうであらうがといふ意なり。○時の御のりは、當時の法令にて、上の御掟なり。○一首の意、よくてもあしくても、その時の上の法令を守りてそむかぬやうにするぞ、神の道のまことなるといへるなり。たとへば、今の代のありさま、上の掟も、下の行ひも、古の道にはかはれることのあらむを、心よからず思ひて、私にいにしへをまねて、行ひなどせんは、却て神の道にも、古の意にもた

がひて、己が私事なり。あしくてもよくても、上の御掟すなはちこれ神の御心なればなり。

ときく〳〵の御のりも神の時々の御ことにしあればいかでたがはむ

○御ことにしあれば、御ことは、命令なり。にしのしは、助辭なり。○いかでたがはむは、俗にたがはうと思てもたがれはせぬ、どうして、たがへられうぞといふ意なり。上の歌にも見えしごとく、神といふ物は、善神惡神さま〴〵まし〳〵て、心々なれば、世間の事も、時々その神の御心にしたがふことにて、上の法令にも、其時々のおもむきさま〴〵ありて、これ皆、其時々の神の御心よりいでくる事なれば、それにさからひたがはんとしても、さかひがたくたがひがたき事ぞとなり。

今の世はいまのみのりをかしこみてけしき行ひおこなふなゆめ

○かしこみては、俗にいふかしこまり奉りてなり。○けしき行ひは、異なる行ひなり。世俗通例ならぬ、異風異體の行ひなり。○おこなふなゆめは、ゆめ〳〵行ふべからずと制するなり。そも〳〵、今の世のありさま、古にはかはれることおほかれば、古學などする人は、それをうれふるがあまりに、己が家の掟身の行ひなどをも、古の體にせんとかまへて、世に異なるふるまひをし、佛なども、もと外國より渡り來たる物にて、神の道にはいたく害ある物なればとて、俄に廢せんとするたぐひ、又漢學にふけりたる輩は、萬の事漢めきて、身をもふるまひ、家を

もおきてなどするたぐひ、すべて普通ならぬ行ひは、かへりて古の道にもそむけるなり。さて筆のついでにいはん。今の代、家々に佛像をおくなどは、上の法令にもかゝりて、天下一同の事なり。そのうへ、おのおのが先祖の人々も皆信じ來りたるも多ければ、これを嫌ひ廢せんは、公にもそむき、私の先祖にも不孝になるかたもあれば、これらはことに世の中のならひにまかせてあるべき事なり。その外よろづの事ども、これに准じて知べし。

やす國のやすらけき代にうまれあひてやすけくてあれば物思ひもなし

○やす國は、上にいでたる、うら安國に同じ。○やすらけき代は、泰平の御代をいふ。俗にいはゞ、何の不足なく安樂なる國にて、時代も又何もあんじ事もない、けつかうなる時代に生れあひて、無爲にくらせば、何も思ふ事もないとよめるなり。かうやうにめでたき御代に生れあひながら、猶世をうらみて、いろ〳〵不足なるよしをいふは、いとあるまじきわざなり。

かりこものみだれりしさまきく時し治まれる代はたふとくありけり

○刈薦は、みだれの枕詞なり。○みだれりしさまとは、昔の亂世の有樣をいふなり。○きく時しのしは、助辭なり。むかしの亂世のありさまを、いひ傳へにても、書傳へたるにても、きく時は、何事も〳〵もあさましくかなしく、心うき事のみなり。それにくらべて思へば、靜謐の御代といふ物は、たふとくありがたき物なりとよめるなり。泰平の御世の惠を、おろそかに思

ひ奉ることを、いましめたるなり。

すめらぎに神のよさせる御としをし飽までたべてあるが樂しさ

○すめらぎは、天皇なり。神のよさせるは、神より天皇に寄せ奉り給ふなり。○御としをし、御としは、田穀のことなり。をしのしは、助辭なり。○あくまでは、十分にといふなり。○たべは、今いふ詞も同じ。食ふことなり。○あるがたぬしさは、よろこばしきといふなり。神代のはじめ、豐葦原の水穗の國は、千五百秋の長五百秋に、我御子の知しめさむ國なりと、高御產巢日神、天照大御神の御命もて、授け奉りたまへれば、天下の田畑より出くる穀物は、皆天皇の知しめす穀物なり。其よし古事記、日本紀、古き祝詞、等に見えたり。さてその天皇の、神より授りたまへる穀物を、下萬民にわかち賜りて、くふなり。もと食ふことを、賜るといふも、かやうの心ばへにや。○一首の意、天皇に、神たちより、寄せ奉りたまへる米穀を、飽まで賜べて居るが、よろこばしきことゝよめるなり。是又神の御惠を、おろそかに思ひ奉るまじき、いましめともなるなり。

事しあればうれしかなしと時々にうごくこゝろぞ人のまごゝろ

○うごく心とは、うれしともかなしとも思ふは、心のうごくなり。何事にても、樂しき事にても、憂はしき事にてもある時は、その事に觸れて、感動するぞ、まことの眞心といふ物なりけ

る。さて此哥の意趣は、次の歌にいひのべたり。

うごくこそ人の眞心うごかずといひてほこらふ人はいは木か

○ほこらふは、矜るなり。るをのべて、らふといへるなり。○岩木かとは、石か木かと、つよく詰りていふ詞なり。世の學者、もの〳〵道理を悟り得て、心の物に動ぜぬといふを、賢きことにいふは、みな眞心にはあらず。いつはりなり、○一首の意、物に動ずる心こそ、人の眞心なれ。動かずといひて矜るは、情無き石瞰木瞰、それは、眞心にてはなきぞ、皆偽ぞとよめるなり。

眞ごゝろをつゝみかくしてかざらひていつはりするは漢のならはし

○つゝみかくすは、色に顯はさぬをいふなり。○かざらひては、飾りてなり。りをのべて、らひといへるなり。潤色し僞り飾るなり。○眞心は、人の生れつきたるまゝの心にて、儒佛などの見をも交へず、うはべをつくろひかざりもせぬ、ありのまゝの心をいふなり。○いつはりするとは、たとへば、心には、嬉しと思ひながら、嬉しきふりをせず、心には欲しく思ひながら、欲しからぬ體をするやうの事なり。かやうに上べは、つくろひかざりて、まことの內心を見せぬやうにするは、漢ごゝろの風俗にて、みな僞なり。

から人のしわざならひてかざらひて思ふ眞心いつはるべしや

○いつはるべしや、べしやは、僞るべき事にはあらずといふを、つよくいふてにをはなり。俗にいはゞ、僞らうことではなきにといふが如し。官祿富貴をもとめず、喜怒哀樂にも動ぜぬ顏をし、天なり命なりなど悟りがましういひて、賢人ぶるは、僞おほき、から國人の風俗なるを、世の人、それをよき事に思ひて、皆それにならふを、深くにくみたる哥なり。そも〳〵これらは、さのみ害にもなるまじき事のやうに思ふ人あるべけれど、然らず。世の中に、物を僞りかざるより、大なる害はなし。たとへば、人の臣下たる者の、內心には、君を殺し、國をうばゝんと思ひかけて、うはべを飾りいつはりて、君を大切に思ふふりをし、忠義らしきふるまひをして、實に忠臣と思はせおきて、つひにその君を殺し、國を奪ふやうなる事も、もとこれ眞心を僞り、上べを飾るよりの、害ならずや、よく〳〵思ふべし。

たまきはる二世はゆかぬうつそ身をいかにせばかも死なずてあらむ

○たまきはるは、命といふことの枕詞なり。新玉來經るといふ意の詞なれば、生る此世のことにも冠らするなり。○二世はゆかぬとは、此命の死て、また改て二度生れ來て、この世を經ることのならぬをいふなり。萬葉第四に、空蟬乃、世也毛二行、何爲跡鹿、妹爾不相而、吾獨將宿、また第七に、世間者、信二代者不往有之、過妹社不相念者などあり。○うつそみは、現の身といふことにて、此世に存生にて在る身をいふなり。○いかにせばかも死なずてあらむ

は、何としたらば不死に居られうぞとなり。○一首の意、死して、又更に二度とは、來直しのならぬ、此身なれば、命は、至極をしき物なり。死ぬるは、しごく悲しき事なり。いかやうにしたらば、死なずにゐられうぞとよめるにて、いつまでも不死あらまほしきよしなり。これ人の眞心をあらはせる哥なり。世間の人みな、儒佛の意にへつらひて、命を惜むをば、愚なる事のやうにいひて、をしまぬふりをする、その僞を、にくみてよまれたるなり。次の二首も同じ。

うつそ身はすべなき物かあかなくに此世わかれてまかるおもへば

○すべなき物かは、俗にせう事もない物かなといふ意なり。○あかなくには、いつまでも存へ居ても飽ことはなく惜く思ふにといふ意なり。○まかるは、死して、此世を去りゆくことなり。

○一首の意、命はあかず惜き物なるに、死して此世を別れゆくことを思へば、人の身といふ物は、せんかたもなき物かなとよめるなり。これ又、人の眞心をしめして、悟りがましきことをいふを、いましめられたる歌なり。

きたな國よみのくにべはいなしこめ千代とことはに此世にもがも

○きたな國は、穢き國なり。○よみの國べは、死てゆく國を、豫美の國といふなり。○いなしこめ、いなは、否の意、しこめは、醜目にて、見ぐるしきことにて、豫美の國をいふなり。古事記豫美のくだりに、伊邪那岐大神、詔、吾者、伊那志許米志許米岐穢國至在、また日

本紀にも、伊弉諾尊、既還乃追悔之曰、吾前到二於不須也凶目汚穢之處一、故當滌去吾身之濁穢などあり。死人のゆく豫美の國は、けがらはしく、きたなく、見にくき國なり。古書に、黄泉國とも、底根之國とも、根國底國とも、根之堅洲國ともあり。○一首の意、けがらはしく穢き黄泉の國は、住ことはいな、千年も萬年も生存へて、此世に在まほしと願ふなり。これ人の眞心なり。

ちはやぶる神の心をなごめずは八十のまがことなにとのがれむ

○ちはやぶるは、上にもいへる如く、あらぶる惡神をいふなり。さればこゝは、たゞに神といふ言の枕詞のみにいへるにはあらず、いちはやくおそろしき意をこめたり。○なごめずは、和らげ幸らずはといふなり。俗にいはば、神のなつとくしたまひて、御きげんの直るやうにせずばといふ意なり。○八十のまがことは、さま〴〵の惡事凶事なり。そも〳〵、神の御心を和むるしわざは、まづ火を清め、よろづ清淨にして、隨分に心をつくしていつき敬ひ、うまき物、よき物を、さゝげ幸り、おもしろきわざをして、神の、よろこび給ふやうにすべきなり。○一首の意、猛き神の御こゝろを、和らげ幸らずは、さま〴〵の禍事を、何とて脫れうぞ、のがれがたからんとなり。

家も身も國もけがすなけがれはし神のいみますゆゝしきつみを

○けがれはしのしは、助辭なり。○ゆゝしきは、忌々しきなり。神のいみきらひ給ふ忌々しき事となり○。罪をのをは、罪なる物をといふ意なり。身も清く行ひ、家をも清淨にして、よろづに穢のなきやうにせよとなり。國も穢すなとは、一鄕一鄕いひあはせもてゆかば、一國中けがるゝ事なく清淨ならん。又國を有つ人のいましめにもあるべし。國の內けがるゝ時は、國の災あるべければなり。○一首の意、穢は、神の、いたく忌きらひたまふ罪なれば、身も、家も、國も、けがさぬやうにせよとなり。

籠の火のけがれゆゝしも家內は火しけがるれは禍おこるもの

○かまは、籠所なり。○ゆゝしもは、大せつにすべきこと、おそれつゝしむべき事なり。萬葉に、かけまくも忌々しきかも、いはまくもあやに恐こきなどあり。○火しけがるればのしは、助辭なり、事が中に、火のけがれほど、忌々しきはなし。最恐れ忌べき事なり。古事記黃泉段に、伊邪那美命答白、悔哉不速來、吾者爲二黃泉戸喫一、これ火に穢あらば、必忌清むべきことの本なり、此御詞をもて、籠の火の穢の、大せつなることを、よく〳〵思ふべし。○まがおこる物は、災難凶事のおこるものぞとなり。火の穢を、なほざりに思ふまじきよし、師の古事記傳に委く說きおかれたり。

けがれをし罪ともしらにみそがずてもだある人を見るがいふせさ

○けがれをしのしは、助辭なり。○しらには、不レ知といふことなり。○みそがずては、身滌せずにといふことなり。身滌とは、川海などにゆきて、身をそゝぎて清むるわざなり。祓といふも同じことなり。○もだあるとは、默止在とかゝれたるが如し。爲べき事をせずに、そのまゝ在をいふなり。俗にも、爲べき事せずに居るを、だまつてゐるといふ是なり。○見るがいふせさ、いふせきは、鬱悒の字をかきて、心の内にもやゝと思はれて、さつはりとせぬをいふなり。こゝにては、みそがずて在人を見ては、きたなくむさく思はるゝをいふなり。○一首の意、物の穢を、それ罪咎ぞともしらずして、身滌祓をもせずして、たゞにある人を見れば、こゝろよからず思はるゝよしなり。

あなかしこよもつへぐひの禍よりぞもろ〳〵の禍おこりそめける

○あなかしこ、俗にあゝ恐ろしやといふ意なり。よもつへぐひは、黄泉戸喫にて、上に引いでたる古事記の文の如し。戸は、竈のことにて、黄泉の國の竈にて炊きたる物を食ひ給へるをいふ。さて伊邪那美命は、これより惡神となり給ひて、伊邪那岐大神の、黄泉より逃かへり給ふ時、豫母都志許賣に追しめたまひ、また八くさの雷神に、千五百の黄泉軍をそへて追しめ給ひ、はてには、御自おひおはしまして、黄泉比良坂にて、大神にむかひたち給ひて、汝の國の人草、一日に、千頭絞ころさむ、などのたまひたる、これみな、かの穢によりて、かく惡神と

なり給へるにて、禍事のいできはじめなり。さて、上にも引出たる如く、かの大神の、身滌に、あらはれ給へる神たちの中に、はじめに、八十禍津日神と、大禍津日神のなり出たまへるは、此二神者、所到其穢繁國之時因汚垢而所成之神者也、とありて、世の中の凶事は、みな黄泉の穢よりおこること、よく〳〵思ふべし。

つみしあらば清き川瀬にみそぎして早秋津姫にはやあきらめよ

○罪しあらばのしは、助辭なり。罪は、穢をいふなり。上の歌にも見えたり。穢を罪といふことなど、師の大祓詞後釋にくはしうときおかれたり。○早秋津姫は、大祓詞に、荒鹽之鹽乃八百道乃八鹽道之鹽八百會坐須、速佐須良比賣神、持可可呑氐武とありて、穢をはらひ失ひたまふ神なり。古事記には、水戸神、名速秋津日子神、次妹速秋津比賣神とあり。○はやあきらめよ、はやは、すみやかになり。あきらめよは、清淨にせよなり。もゝ穢あるは、くもれるが如し。はらひ清めたるは、明らかになりたるなり。○一首の意、人もし穢あらば、清き川瀬に、おりたち身滌して、速に祓ひ清めよとなり。

まがことをみそがせれこそ世をてらす月日の神はなりいでませれ

○みそがせれこそは、身滌し給ひたればこそなり。○成出ませれは、生れ出たまひたれといふなり。伊邪那岐命の、黄泉の國にまし〳〵ける、その穢禍事を、祓清めたまひたればこそ、

天地にかゞやきて、世を照らし給ふ、清浮明麗なる、日月の神は、出生したまひたれ。しかれば、世の人、身に穢のあらん時は、身滌祓(ミソギハラヒ)をして、速にはらひ清むべきなり。さて此歌を、終(ツキ)に伎賢木(サカキ)の歌を、巻頭におかれたること、心あるべし。此うたより立かへりて、巻頭の哥へつゞけて見れば、いよ〳〵意味深長なり。

阿麻理歌

あまりうたとは、百首のうへに、餘れる哥といふなり。

かつ〳〵も百ちのうたにいきどほるこゝろのをろをのばへつるかも

○かつ〳〵は、物のいできかゝれることをいふ詞にて、十いでくべき物の、まづ一つ二つ出來たるやうの事をいふなり。されば、まづ少しばかりと心得べし。○百ちのちは、はたち、みそぢ、などのちなり、ちぢなどのぢも同じ。○いきどほるは、心の内にむすぼゝるゝことをいふなり。○心のをろとは、心の緒といふことにて、ろはそへたる言なり。たゞこゝろのことゝしるべし。○のばへは、のべといふことにて、思ふことを、歌によみあらはすをいふなり。○一首の意は、三四二一五と句を置かへて心得べし。心のうちにむすぼゝれて、もやもやと思ふことは、千萬(チヨロヅ)なれども、百首の哥に、まづすこしばかり、述(ノ)いであらはせりとなり。

思ふことうたへばなぎぬ言靈(コトダマ)のさきはふしるしまさしかりけり

○うたへばとは、哥によみいづればといふも同じ。○なぎぬとは、心の晴ることなり。なぐさむといふ詞も此意なり。雲霧などの、はれ、荒き風の、和らぐことをも、なぐといふに同じ。

こゝは、心の内に、もや〳〵とせしことの、晴れたるをいふなり。○言靈は、御國の言語には、靈のあるをいふなり。○さきはふは、幸をあたふるをいふ。萬葉に、言靈能、佐吉播布國、またこと靈之、所佐國などあり。○一首の意、心の内に思ひむすほゝるゝことも、歌によみいづれば、その心のはるゝは、まことに、言靈の幸ひ助けたまふ驗は、たがはざりけりとなり。

百うたにとぢめてはあれど千歌にも思ふこゝろはあにつきじかも

○とぢむとは、終へ止むるをいふなり。○豈は、いかでといふ意なり。但し漢文に、つねにいふ格にては、豈つきんやといふべきなれども、不といへることも、古き歌には例あり。○つきじは、盡はすまじなり。○かもは、輕く心得べし。○一首の意、百首にて、まづ終へとぢめたれども、思ふ心のほどは、千首によみたりとも、いかでかつきすべき、盡はすまじきかとよめるなり。

とこしへに世をてらします日のみたまつけし鏡は伊勢の大神

○とこしへは、永々不變なるをいふ。○日のみたまつけし鏡とは、天照大御神の御靈を、託うつし給ひし御鏡をいふなり。古事記に、於是副賜其遠岐斯、八尺勾璁、鏡、及草那藝劍、亦常世思金神、手力男神、天石門別神、而詔者、此之鏡者、專爲我御魂而、如拜吾前、伊都岐奉、とある、これすなはち、伊勢の大御神なり。この御鏡、いせに御鎭座の事は、日本紀

の垂仁巻に見え、大神宮儀式帳にくはしく見えたり。

ひむかしの國ことむけてみつるぎはあつ田の宮にしづまりいます

○ことむけは、平治なり。○みつるぎは、草薙劒なり。此御劒の事、古事記、日本紀に見えたるが如し。○あつたの宮は、寛平の熱田大神緣起に、正二位熱田大神者、以二神劒一爲レ主、本天叢雲劒、後名二草薙劒一、其祠立二於尾張國愛知郡一云々、延喜式の神名帳に、尾張國愛智郡熱田神社、また日本紀に、是草薙劒、此今在二尾張國吾湯市村一卽熱田祝部所掌之神是也、など見えたり。○ひむかしの國言向てとは、此御劒を以て、倭建命の、東の國々を平治し給へることなり。さて、東國を征し給ひしは、倭建命にてはあれども、みなこの御劒の神威の、助けたまへるなれば、この歌に、國ことむけて云々とは、專御劒をかけてよめるなり。○一首の意、三の句を上へめぐらして、御つるぎは、東の國々を平治して、さてつひに、熱田の宮に鎭座したまへりとなり。

久方の天つ日嗣の御たからと御もとはなたぬやさかまがたま

○ひさかたは、天の枕詞、○天つ日嗣は、天皇の御代々々御位つぎ給ふことなり。上にも出たり。○御たからとのとは、としての意なり。御代々々つたへ給ふ御寶としてなり。○御もとはなたぬは、天皇の御許離ち奉り給はぬなり。○やさかまがたま、やさかは、彌眞明の意にて、

明らかにてれるをいふなり。まが玉は、横井千秋の考に、まかゞ玉にて、目かゞやく玉の意なりとあるを、古事記傳にも用ひられたり。古事記に、科三玉祖命一、作二八尺勾璁之五百津之御須麻流之珠一而とあり。また天香山之五百津眞賢木矣、根許士刺二許士一而、於二上枝一取二著八尺勾璁之五百津之御須麻流之玉一、また日子番能邇々藝命天降り給ふ時、天照大御神より授奉りたまふ、その文、上の鏡に所に引たり。日本紀、天照大御神、乃賜二天津彦々火瓊々杵尊一、八坂瓊曲玉及八咫鏡草薙劍三種寶物一とあり。建暦御記、寶劍神璽の條に、神璽自二神代一于レ今不レ替、云々此二、夜御殿御帳中、枕二階上一案云々、自二神代一如レ見レ我被二督護一、尤可レ敬事也、云々などあり、これ神璽とまうす御寶なり。さて、右の三首は、三種神器の御事をよまれたり。これ天つ日嗣の御璽にして、道にかゝれる重き御寶なる故に、このあまり歌のはじめにおかれたるなるべし。

みづ垣の宮の大御代は天地のかみをいはひて國さかえけり

○水垣の宮は、崇神天皇の御代の、都の名なり。此天皇、神祇を殊に重く敬ひ奉り給ひて、御祭ども嚴かにて、天の下にぎはひ榮えけるなり。古事記のこの御代の段に、此天皇之御世、役病多起、人民死爲レ盡、爾天皇愁歎而坐二神牀一之夜、大物主大神、顯二於御夢一曰、是者我之御心、故以二意富多多泥古一而、令レ祭二我御前一者、神氣不レ起國安平、是以驟

使、班二千四方一、求下謂二意富多多泥古一人上之時、於二河内之美努村一、見二得其人一、貢進、云々、於是天皇大歡、以詔二之天下平人民榮一、即以意富多多泥古命爲二神主一而、於二御諸山一拜二祭意富美和之大神前一、又仰二伊迦賀色許男命一、作二天下八十毘羅訶一、定二奉天神地祇之社一、又於二宇陀墨坂神一、祭二赤色楯矛一、又於二大坂神一、祭二黑色楯矛一、又於二坂之御尾神及二河瀨神一、悉無二遺忘一、以奉二幣帛一也、因レ此而、役氣悉息、國家安平也、とあり。

めかゞやくたからの國をことむけの神のさとしはたふときろかも

○めかゞやくは、きら〳〵とかゞやきて、目のまばゆきことにて、金銀のたぐひをいふ。○財の國とは、かの金銀などの多かる國をいふ。三韓のことなり。○言向は、したがへてなり。上にもいへり。○神のさとしは、神託なり。たふときろかも、ろは助辭、かもは哉なり。日本紀仲哀天皇卷に、時有レ神託二皇后一而誨曰、天皇何憂二熊襲一不レ服、是膂之空國也、豈足二擧レ兵伐一乎、愈茲國而有二寶國一、譬如二美女之睩一有二向津國一、眼炎之金銀彩色多在二其國一、是謂二栲衾新羅國一焉、とあり。古事記には、故天皇、坐二筑紫之訶志比宮一、將レ擊二熊曾國一之時、天皇控二御琴一而、建内宿禰大臣、居レ於二沙庭一請二神之命一、於是大后歸神、言教覺詔者、西方有レ國、金銀爲本目之炎耀種々珍寶多二在其國一、吾今歸二賜其國一、云々など見え

たり、さてその後、神功皇后、神託にまかせて、新羅の國を伐たまひ、高麗百濟も從ひ參りて、つひにこの財の國を得たまへり。

古ことを今につばらにつたへ來て文字も御國のひとつみたから

○古ことは、神代よりはじめ、上代のかたり傳への古辭なり。○つばらは、つまびらかなり、上にも出たり。○もじは、漢字なり。かの神代よりはじめ、御代々々の古事ども、日本紀、古事記、そのほかこれかれの古書どもにつたはれるは、その文辭、みな漢國の文字を、借り用ひて、かき記したるなれば、後代の今にいたるまで、そのかみの有樣を、つまびらかにうかゞひ見るは、文字の德なり。よてこの文字といふ物も、御國の一つの御寶なりとよめるなり。上の歌に、たからの國をとよめると合せて味ふべし。日本紀應神卷に、十六年春二月王仁來之、則太子菟道稚郎子師之習三諸典籍於王仁一、莫レ不三通達一、故所謂王仁者是書首等之始祖也、とあり。古事記には、又科賜百濟國、若有二賢人一者貢上、故受レ命以貢上人名和邇吉師、卽論語十卷千字文一卷幷十一卷、付二是人一貢進、とあり。王仁とあるも和邇吉師のことなり。御國に文字あることは、この時より始れり。さて此二首は、近世の學者、異國より萬の事の來れることを、ひたすらあしきことにのみいふが、偏なることをいきどほりて、よまれたるなり。あしきのみにはあらず、益あることも又おほかるを思ふべし。

こすげよし蘇我のうまこは天地のそこひのうらにあまるつみ人

○こすげよしは、そがの枕詞なり。萬葉などには眞菅よしとあり。よしは、助辭なり。さて、眞すげといひては、いさゝかほむるこころあるやうにきゝなさるれば、言をかへて、小菅とよまれたるなるべし。○天地のそこひのうら、そこひは、限といふこと、うらは、内といふことなり。いはゆる六合の内などいふが如し。萬葉十五卷に、安米都知乃、曾許比能宇良爾とあり。○あまる罪人とは、天地の間にもおき所なき大罪人といふなり。日本紀崇峻天皇卷に、五年冬十月云々、蘇我馬子宿禰、聞二天皇所一レ詔、恐レ嫌二於己一、招二聚黨一者一謀レ弑二天皇一、云々十一月云々、馬子宿禰詐二於羣臣一曰今日進二東國之調一、乃使二東漢直駒一殺二于天皇一、とあり。いとも〳〵ゆゝしくまが〳〵しく、うへもなき逆しま事になんありける。

くなたぶれうまこが罪もきためずてさかしら人のせしはなにわざ

○くなたぶれは、頑狂なり。續日本紀第廿の宣命に、惡逆在奴、久奈多夫禮麻度比某某伊、逆黨乎伊射奈比率而、云々また、久奈多夫禮良爾、詿誤百姓波、云々などありて、朝廷にむかひて、凶逆のふるまひをなす、不忠不義の者をいへり。○きためずては、不レ罰而なり。これも同紀第四十卷の宣命に、是乎任法爾問賜比支多米賜倍久在止母云々日本紀皇極卷の歌に、禹都麻佐波、云々宇智岐多麻須母とあるも同じ詞なり。○さかしら人のせしはなにわざとは、そ

の代に賢き人のし給ひしは何わざにてありしぞ、といへるにて、天皇を弑し奉りし、蘇我馬子が大罪をば、罰せずして、賢人がましきかほして、かしこげに行ひししわざは、何事を行ひしぞ、と深くとがめたるなり。まことに、かゝるいみしき大事をばさしおきて、いさゝかもとがめずしては、外にいかばかりの功ありとも、善行ありとも、そは取にたらざるなり。かれ大平ひそかに思ふに、この歌は、作者の下のこゝろ、聖徳太子の御事を指るか、さるは皇太子にましませば、はゞかりて、御名をばさゝれざるにや、こはおしはかりなり。

馬子らが草むすかばね得てしがもきりてはふりて恥見せましを

○草むす屍は、年を経て、草などの生たる、死屍をいふなり。續日本紀十七巻の宣命に、海行波美津久屍、山行波草牟須屍とあり。萬葉十八巻の長歌にも同じさまにあり。○得てしがもは、得まほしきなり。○きりてはふりては、斬散なり。はふるは、屠と同言なり。古事記崇神段に、斬二波一布一理其軍士一とあり。○恥見せましをは恥を與へ辱しめん物をといふなり。○一首の意、逆臣馬子等が死骸こそ、得まほしけれ。得たらば、斬て〳〵、はふり散して、恥かしめん物をとなり。いたく怒りにくめるなり。

わたのそこおきついくりにまじりけむ君のまもりのつるぎたちはや

○わたの底は、海底にて、澳の枕詞なり。○おきついくりは、澳津石にて、海中にある石をい

ふなり。萬葉六卷の長歌に潮底奥津伊久利二とあり。集中に猶多し。○まじりけんは、海底の石に交れるにて、この劔寶の、西海に沈みうせ給へるをいふなり。○君のまもりのつるぎ太刀は、かの三種の神器の中の寶劔を申すなり。○はやは、その寶劔の、潮底にうせたる事を思ひて、歎きたる詞にて、倭建命の、吾嬬はやとのたまへるに同じ。さて、此寶劔は、かの神代の物は、尾張國熱田にまし〳〵て、御代々々、天皇の御許にましますは、そのかはりとして崇神天皇の御代に、摸しつくらせ給へる御劔なり。かの文治元年三月廿四日平氏滅亡の時、相國清盛の後室從二位平時子、安德天皇をいだき奉り、神璽を懷にいれ、寶劔を腰にさして、海底に入ぬるは、いとあさましかりけるわざなりけり。その後、神璽は浮みいでゝ、內侍所と共に、京に還り入らせ給ひぬるを、この御劔のみは、いまだ出たまはずとなん。

鎌倉のたひらのあそがさかわざをうべ大君のいからせりける

○あそは、朝臣なり。平氏のかばねは、朝臣なればなり。鎌倉の平朝臣とは、北條氏をいふ中に、ことに逆臣義時泰時をさすなり。○さかわざは、逆さま事なり。朝廷をはじめ天下の事、恣に執行ひて、天皇の大御心に、そむき奉れるをいふなり。○うべ大君の怒らせりけるは、義時泰時が跋扈なるを、後鳥羽の帝、順德の帝、逆鱗ましく〳〵て、誅伐し給はんと思したちし御事を、諾なり、まことにことわりなり、と申せるなり。

おきの嶋ゆみ矢かくみていでましゝ御心おもへばなみだしながる

○弓矢かくみては、弓劍を帶したる武士ども、圍奉りてなり。萬葉六卷の長歌に、ししじもの弓笑圍而とあり。○いでましは、行幸御幸などのことなり。○涙しのしは、助辭なり。そもそも後鳥羽天皇、北條をこそ、打ほろぼさんと思ほしめけるに、かへりて、御みづから、隱岐の國に、遷されましますほど、武士どもの、あさましく取圍み奉りて、うつし奉りけるをり、うれたくも、口をしくも、思ほしめしけむと、大御心のうち、今思ひやり奉るにも、憤りの涙とゞめがたしとなり。

おもほさぬ隱岐のいでましきく時はしづのをわれも髮さかだつを

○おもほさぬは、思食もよらぬなり。○しづのをわれは、賤の男吾なり。○髮さかだつを、をは輕くして、よといはんが如し。歎息のてにをはなり。髮逆起とは、いみしう憤り怨る時は、髮も逆だつやうに思ふなり。清少納言枕双帋に、笛はしか〳〵といふくたりに、篳篥は云々、いみしううるしきかみ、もたらん人も、みなたちあがるべきこゝち云々。狹衣物語に、まことにかしらの髮も、逆頭さかさまになるこゝちしてなどあり。漢書にも、髮盡上指冠、また壯士髮衝レ冠なとあり。

かまくらのたひらの子等がたはわざはそがの馬子に罪おとらめや

○平の子等は、かの北條の義時泰時らをいふなり。○たはわざは、狂態なり。こゝは、朝廷にむかひて、無道なるをいふなり。まことや、承久三年、北條追討の事、思食たゝせ給ふよし、鎌倉に聞えければ、時房泰時時氏、十萬餘の軍を率て、東海道よりせめのぼり、東山道、北陸道よりも、武士どもおびたゝしくせめのぼり、六月、宇治勢田にて、いみしうたゝかひて、官軍敗北しければ、泰時等、京に入て事おこなひ、七月後鳥羽帝を、鳥羽の院にうつし奉り、新帝を、九條の院にうつし奉り、さてつひに、後鳥羽帝を、隱岐に、順德帝を、佐渡に、雅成親王を、備前に、土御門帝を、土佐に、（後に阿波に物せさせ給へり。）うつし奉りぬ。暴逆に暴逆をかさねたる北條がしわざ、馬子が罪にも異なることなしとなり。そも馬子は、天皇を弑し奉り、北條は、遠所にうつし奉れるのみにて、弑し奉れるまではあらざりしを、その罪、馬子におとらじといへるは、北條を、深く惡みてなり。

大きみをなやめまつりし多夫禮らが民はぐゝみて世をあざむきし

○大きみは、天皇なり、上にもあり。○なやめまつりは、令惱奉とかゝれたるが如し。

○多夫禮らは、狂賊の輩をいふ。日本紀齊明の卷に、狂心を、たぶれごゝろとよみ、萬葉十七卷にも、多夫禮多流しこつ翁とあり。久奈多夫禮の、たぶれも同じ。○民はぐゝみて世を欺きしとは、北條の代々の中に、泰時時頼などは、政事正しく、あつく民を撫しこと、その聞え高

し、又泰時に、三位のくらゐを賜はんとありし時、恐れあるよし申して、辭したるなどは、ことに、例の世人をなつけんためにいひし、漢人流の僞なり。三位の位になることをだに恐れんものゝ、朝廷を蔑にし、天皇をなやまし奉り、遠所にさへうつし奉れるは、いかにぞ。かれらが仁政、みな僞にて、世人を欺ける事いちじるし。もしまことの賢人ならば、いかでかさることのあらん。

まがつびのそのまがわざに世の人もあひまじこりし時のかなしき

○あひまじこりは、禍津日神の心に厭はれて、世の人、禍事を行ひしをいふなり。御門祭の祝詞に、四方四角與利疎備荒備來武天能麻我都比登云神乃言惡事爾相麻自許利相口會賜事無久云々、道饗祭の祝詞に、根國底國與利麁備疎備來物爾相率相口會事無云々などあり。北條が代のほど、天下の人、みな欺かれて、かれを、まことの賢人と思ひて、從ひなびきしは、皆禍津日神に、まじなはれたるものなり。かけまくもいともかしこき、天皇の御位を、はゞかりなく、いろひ奉り、まして鎌倉將軍の嗣々などをば、むげに思ふまゝにはからひて、ひたぶるにほしいまゝなりしは、あさましきわざなりけり。そも〳〵、禍津日神の御あらびは、保元平治のころほひやゝさかりにして、北條足利が代は、荒びの極みにぞ有ける。

よき人といふはたがこと鎌倉のたひらの子等はくにのつみびと

○よき人といふは誰言とは、世に賢臣といひもてはやすは、いかなる人の、いふ言ぞと、深くとがめたる詞なり。○鎌倉の平の子等は國の罪人とは、かの泰時などが輩は、天下の逆臣にてこそあれとなり。然るを、當時の人のみならず、後世の物しり人どもまで、實の賢人と思へるは、皆禍津日神に、まじなはれたるものなり。

おふけなく御くにせめむともろこしのからのこきしがたはわざしける

○負氣なくは、俗にいふ、分不相應なるをいふ。上にくはしくいへり。此句は、結句のたはわざしけるといふへかけて心得べし。○もろこしのからのとは、西方なる外國を、惣て戎といへば、唐土も、その戎の內なる故にいへり。唐といふからといはんが如し。○こきしは、王なり。外國の王を、こきしとも、こにきしとも、いふなり。もとは、百濟國の語にて、百濟王をいひしが始なれど、すべて、異國の王をもいふよし、古事記傳にくはし。この歌にては、蒙古の王をいふなり。○たはわざしけるとは蒙國の元首たる、此神國を、犯し奉らんと謀れるは負氣なき狂態なり。萬葉廿卷に、いざ子ども、多波和射なせそ、天地の、かためし國ぞ、やまと嶋根は、とあり。弘安四年七月、蒙古の兵船おしわたり來て、西國に寇す。其ほど、京も波羅にも、西國加勢の軍をしたてゝ、とりぐ〳〵に評定あり。朝廷にも、いみしうおどろかせ給ひて、諸所に、祈どもあり。伊勢石清水加茂春日廿一社を始として、國々に勅使奉幣の事どもあり。さる

ほどに、閏七月朔日、俄に大風吹いでゝ、蒙古の船、悉く破損して、十萬の勢、たちまち底の水屑となりてうせぬ。此度の大風は、まことに天神地祇の靈驗にて、朝廷をはじめ、京鎌倉の、貴きみじかき老たるわかき、ありがたき、神の稜威を、感ぜぬはなかりけることなど、書どもに見えたり。うごき無き、神國の御稜威は、かくばかり、いちじるきものを、異國の王の、うかゞひしは、まことに、おふけなき狂態にぞありける。

かしこきやすめらみくさにいむかひてなやめ奉りしたぶれあしかゞ

○かしこきやは、恐れ多きなり、やは助辭なり。上にも出たり。○皇御軍は、いはゆる官軍なり。○いむかひは、射向にて、敵たふことなりなり。○なやめまつりしは、上にも出たり、こゝは足利が不臣、宸襟を惱しめ奉れるなり。○たぶれは、狂賊なり。○あしかゞは、尊氏直義をさすなり。建武元年より曆應康永貞和觀應の間あまたたびの賊に、官軍にいむかひ奉りて、いともゆゝしき朝敵にて、かれらが、暴逆のふるまひ、その間の軍ぶみに記して、世の人みなしれる事なり。

いかなるや神のあらびぞ眞木のたつあら山中にきみが御代經し

○神のあらびとは、世の亂れ萬の逆しま事などのあるも、皆神の御心のあらびより起ることなればいへり。そのよしを、上の歌どもに所々にいへり。○眞木のたつは、荒山の枕詞なり。○

あら山中は、あら野、あら海、などいふと同じく、はるかにへげ遠き山中をいふなり。こゝは、吉野の山の奥をいへり。○君が御代經しとは、天皇の御代々々經給ひしをいふなり。いともかしこく、天皇の、さる荒山中に、皇居をしめさせ給ひて、御心にもあらず、御代々々を經たまひし事は、掛てもあるまじき、世のありさまにぞありし。これみな足利が罪にて、かの惡神の御心よりおこれるなり。その御代々々は、後醍醐天皇、後村上天皇、後龜山天皇三代なり。

から國にこびてつかへてあしかゞのしこの臣御國けがしつ

○醜の醜臣、醜とは、そのものを、にくみ罵ていふ詞なり。上に醜のものしり、又いなしこめ、などの所にいへるも同じ。萬葉十七卷の長哥に、多夫禮たる之許都おきなのともあり。こゝにては、足利義滿將軍より代々、唐土の明王に、媚へつらひて、臣と稱して、かの國の、封を受られたることを、にくみていへるなり。その間の事ども、すなはち師の駁戈慨言に、くはしく論ぜられたり。ひらき見べし。萬國の上にたつべき、尊き御國の大將軍とある人の、いとあぢきなく、さるいやしき唐土の王に、媚諛ひしたがひ給へるは、まことに、尊き御國を、穢せるにて、いともゝ口をしきわざなりけり。そのかみ既に此事をいひて、我國開闢已來、異朝の爵を受し例なし。義滿が時に及て、異朝に臣と稱する事は、日本の恥なりと評ぜられたり。

天のしたとこ夜ゆくなす足利のするのみだれのみだれ世ゆゝし

○常夜ゆくとは、常闇にて過行なり。天照大御神、天の石屋戸を閉て、さしこもりましくけるほど、高天原みな暗く、葦原中國ことごとに闇し。これによりて、常夜往と、古事記に見ゆ。日本紀には、常闇とあり。さてその時、萬神の聲は、狹蠅なす皆涌、萬妖ことごとに發りきとあり。古事記傳を見て、そのよしをしるべし。さて此足利家の末のころ、朝廷、いみしく衰へさせ給ひて、將軍家も、威光おとろへはてゝ、天の下、亂れに亂れたるありさま、かの神代の、石屋ごもりの常闇の間の、妖怪おこり荒ぶる神あらびたりしに、甚よく似たるゆゑに、常夜行那須とよめるなり。那須は如くなり。かの應仁のころより、京都も、大に亂れ、足利の家人、たがひに權をあらそひ、國々には、大名おのくく威をふるひて、天のした、戰なき國もなく、一日片時も、安き心なくて、代々の將軍も、いく度か都を逃出て、近國に潛ひたまひ、朝廷の御政も、よろづ廢れ、百官も、京の住ひ堪たまはずして、遠き山里、或は田舍にさすらへ給ひなどせし、世のありさまはまことにあさましく、常闇に異ならずなんありける。

○一首の意、天下のありさま、かの神代の、常闇なりし時の如く、みだれにみだれたりし、足利の末の、亂世のありさまは、ゆゝしくいまくしとよめるなり。

いつまでか光かくらむ久かたの天のいは戸はたゞしばしこそ

○いつまでか光隱らむとは、何時までか光の隱れてはあらんとなり。かくらむは、かくれんと

いふと同じ古言のいひさまなり。○天のいは戸はたゞしばしこそとは、天照大御神の、天の石戸にこもりましゝける間は、暫の間にてこそありけれといふなり。そは、北條の代のさかさまごと、足利の代の天下のみだれも、かの常闇の如くにてありしかども、それは、何時までか然らん、ほどなく、めでたき靜謐の世に、立かへりたるものをと譬へたるなり。そも〳〵其亂れは、白川堀川鳥羽崇徳の御代のころよりはじまりて、後奈良天皇まで、すべて五百年ばかりの間なるを、天地月日とゝもに、限なき御世の永き間にとりては、たゞ暫くの程の事にて、程なく、正親町天皇の御代より、又やう〳〵治り始めて、つひに、明らかなる御代に、立かへりぬるなる、そのよし、次の歌どもにてもしるべし。

しづはたを織田のみことはみかどべをはらひしづめていそしき大臣

○倭文機をは、織といふ詞の枕詞におけるなり。倭文は、上代の一種の服なり。○織田の命は、總見院右大臣織田信長公なり。命とは、人をあがめて、某の命といふ、上代の例なり。○いそしき大臣とは、功績ある大臣となり。此大臣、正親町天皇の御代永祿のころ、尾張の國より出給ひて、京中の騒亂をしづめ、畿内近國を討したがへ、復平の基を開き、内裏を修理し奉りなど、勳功おほいなること、世の人よくしれる事なり。いそしき大臣とは、これを賛てよまれたるなり。

まつろはぬ國等ことごとまつろへて朝廷きよめし豐國の神

○まつろはぬは、不ㇾ服なり。○國ぐことごとくは、國々盡なり。○まつろへては、平治してなり。○みかど清めしとは、朝廷を崇敬奉護し、京師を再興し給ひしをいふ。○とよくにの神は、豐臣太閤秀吉公なり。慶長三年八月十八日薨、同四年四月十八日勅して、豐國大明神とあがめ給へり。

とよ國の神の御いつはもろこしのからのこきしもおおまどふまで

○御稜威は、武勇神威の御稱ひなり。○おおまどふは、畏懼惑ふなり。○からのこきしは、こは、明の王なり。かの朝鮮征伐のをり、明王が怖おそれけること、御國の軍書にも、明の書どもにも見えて、世の人のよくしれることなり。馭戎慨言にも委くしるされたり。そもそも、かの足利將軍の、明王にこび諛ひ給ひしと、この豐臣太閤の、御いきほひとを、くらべて思へば、同じ御國にして、世代の盛衰は、いみじきたがひなりけり。

あづまてる御神たふとし天皇をいつきまつらす御いさを見れば

○あづまてる御神とは、字面のとほりなり。○天皇をいつきまつらすとは、朝廷を、崇敬し奉り給へる御事なり。奉らすは、奉り給ふといふと同じ詞なり。御いさを見ればとは、朝廷を、あがめ敬ひ奉り給へる御事どもを見ればなり。これ、此神君の第一の御功なり。その功績を思

ひ見れば、いともいとも尊しとなり。

安御代と君のおほ御代をあづまてる神の命ぞかためたまへる

○やす御代は、萬たらひて安き御代をいふ。太平の御代の事なり。○神の命ぞ、此ぞもじ、重きてにをはなり。君の大御代を、かく永世太平にかため給へるは、此東照神の命ぞ、しかし給へると、つよくいへる詞なり。○固めたまへるとは、神君の、天下四海の外までも、いさゝかのみだれもなく、萬代までも、うごくまじく、固めたまへるをいふなり。此哥も、三四の句を、上へめぐらして心得べし。

東照るかみのみことの安國としづめましける御世はよろづ代

○神君の、大將軍とまし〳〵て、天のしたの御政申たまひけるより、古にもたぐひすくなく、めでたく治りたる、此泰平の御代は、萬々代の末々までも、動きなく、變るべからぬを、祝ひ奉れるなり。此哥も、三の句を、はじめへうつして心得べし。

玉鉾百首解終

附載

本末歌 鈴屋集五

本居宣長

河上の丹生のそま山。斧とりて眞木の大木を。中のまを宮木にきりて。山つみにのこしてまつる。本末のことわりしるく。赤根さし豐さかのぼる。日の本のこれの山跡は。掛まくもあやにかしこき。天照すその日の神の。あれましゝ本の御國と。その御子のしらす御國と。其神の御かげかゞふる。天地のそこひのうらに。天傳ふくたちの末に。むらぎものむらがりつづき。玉だれのをくに大國。もゝ八十と國はおほけど。日の末のその國國は。末國と末のしわざに。もちどりのかゞらひなづみ。言きよくいひはいへども。刺竹の君をなみして。やつこらい君にかはりみ。君らはも奴になりみ。よし野川早き時より。國の本道の本はし。水鳥のたゝずとほらず。かりごものみだれてあるを。本國は本の神世の。御よざしの本のまに〳〵。いそのかみふる野の道の。本がしは本かたくして。望月のかけずうこかず。久方の天つ日嗣は。神ながらいやつきつきに。むくさかに傳はりまして。大君は神にしませば。高御座たかき御かげを。ものゝふの八十伴緒も。天の下四方の御民も。ところつらいやとこしへに。かしこみてあふぎまつろひ。たまきはるよゝをし

ふれば。人國の教よろしと。さかしらをならはひ學ぶ。人はしも多くあれども。たまちはふ神のめぐみと。しかすがに本をわすれず。末々のいさゝけわざも。いにしへのあとをたづぬる。本國のてぶりうるはし。こゝをしもあやにたふとみ。言擧せぬ國とはいへど。ことあげしてたゝへまつらく。あし原の水穗の國は。百八十の國のおや國。もゝやその國の本國。うまし國ほ國眞秀國。うらやすの國。

反歌

世の人の本の本末思はずて末のもとするぞいふがおろかさ

附記

本書收錄した玉鉾百首の本文は、普通本にある東照宮を讃へた終りの三首のないものである。青柳高鞆が、明治三年に白文で刊行した

玉鉾　百首　附本末歌

には、思ふ旨ありて、餘り歌の末なる三首を除いたとあるが、この原本は、刊記は缺くが、もとより高鞆本以前の木板で、字體も本居風である。

併し大平の解には、件の三首をも擧げて註釋を施してあるから、今普通本によつて補ひ記しておく。すなはち「豐國乃神之」云々の歌に續くものである。（四七頁參照）

東照御神貴志天皇袁伊都伎奉良須御功績見禮婆
安御代登君之大御代袁阿豆麻弖琉神乃命叙固米賜閇流
東照神命之安國登志豆米坐祁流御世者萬代

[illegible]
昭和十六年四月十五日發行

岩波文庫

1324

昭和十一年七月二十五日印刷
昭和十一年七月三十日發行
昭和十五年十二月二十日第五刷發行

直毘靈・玉鉾百首 ★

定價二拾錢

校訂者 村岡典嗣

發行者 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波茂雄

印刷者 東京市神田區錦町三丁目十一番地 白井赫太郎

精興社印刷

發行所 東京市神田區一ツ橋二丁目三番地 岩波書店

電話〇一八七・〇一八八番
九段〇一八九・〇一八〇番
一〇二二番(小賣部專用)
振替口座東京二六二四〇番

（複本製本）

小店出版物中、萬一不完全な品（落丁・亂丁等）がありました節は、御手數乍ら洩れなく御申出下さる事を御願ひ致します。たとへ御讀後でありましても早速お取替致します。

讀書子に寄す

——岩波文庫發刊に際して——

岩波茂雄

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。嘗ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狹き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに勵まされて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に隈なく立たしめ民衆に伍せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽すと誇稱する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の飜譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繫縛して數十册を强ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあたつて岩波書店は自己の責務の愈重大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より忘して來た計畫を愼重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等種類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡易なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原理を提供する。この文庫は豫約出版の方法を排したるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各個に自由に選擇することが出來る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも內容に至つては最選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犧牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此事に參加し、希望と忠言とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうるはしき共同を期待する。

昭和二年七月

岩波文庫最新刊書

既刊一一六五册（昭和十五年十月）

文庫目錄

「解說目錄」當分品切乞御諒承。「書目綜覽」は御申越頂けば早速お送り申上げます。

息子たちと戀人たち（二）	ロレンス作 本多顯彰譯	★★
オーベルマン（上）	セナンクール作 市原豐太譯	★★★
葦と泥	プラスコ・イバーニエス 高橋正武譯	★★★
大鹽中齋 洗心洞箚記	山田準譯註	★★★★
化學の學校	オストヴルト著 都築洋次郎譯	★★★
聖教要錄・配所殘筆	山鹿素行著 村岡典嗣校訂	★
漱石小品集	夏目漱石著	★★★
クリスチナ・ロセッティ詩抄	入江直祐譯	★★
魔の山（三）	トオマス・マン作 關泰祐譯 望月市恵譯	★★
三つの物語	フローベール作 山田九朗譯	★★
科學談義	テイ・エッチ・ハックスリ 小泉丹譯	★★
古今著聞集 上卷	黑板勝美 丸山二郎校訂	★★★
常山紀談 下卷	湯淺常山著 森銑三校訂	★★★
童話集 一房の葡萄 他五篇	有島武郎作	★
虛榮の市（六）	サッカレ作 三宅機三郎譯	★★
聖アントワヌの誘惑	フローベール作 渡邊一夫譯	★★★
孝經・曾子	武內義雄 坂本良太郎譯註	★★
見聞談叢	伊藤梅宇著 龜井伸明校訂	★★★
日本の目覺め	岡倉覺三著 村岡博譯	★
千一夜物語（一）	豐島與志雄 佐藤正彰譯 渡邊一夫	★★
夏の夜の夢	シェイクスピア作 土居光知譯	★★
未成年 上	ドストエーフスキイ作 米川正夫譯	★★★

形而上學　ハンス・ドゥリーシュ著　清徳保男譯　★★

古事記傳（一）　本居宣長撰　倉野憲司校訂　★★★

澀江抽齋　森鷗外作　★★★

魔の山（四）　トオマス・マン作　關泰祐譯　望月市恵譯　★★

感情教育上　フローベール作　生島遼一譯　★★

判斷力批判下卷　カント著　大西克禮譯　★★

レオン・日本切支丹バジェス宗門史下卷　クリセル神父校閲　吉田小五郎譯　★★★

古今著聞集下卷　黒板勝美校訂　丸山二郎校訂　★★★

カインの末裔クラランの出家　有島武郎作　★

エリア隨筆　ラム著　戸川秋骨譯　★★

アグネス・ベルナウエル　ヘッベル作　吹田順助譯　★★

道徳系譜學　ニーチエ著　木場深定譯　★★

國富論（一）（第一編）　アダム・スミス著　大内兵衛譯　★★

足迹　徳田秋聲作　★★

怪談　ラフカディオ・ヘルン作　平井程一譯　★★

魅せられたる魂（一）　ロマン・ロラン作　宮本正清譯　★★★

可愛い女犬を連れた奥さん　チェーホフ作　神西清譯　★

人文地理學原理下卷　ブラーシュ著　飯塚浩二譯　★★★

ケトレー人間に就いて下卷　高野岩三郎校閲　平貞藏譯　山村喬譯　★★★

柳橋新誌　成島柳北著　鹽田良平校訂　★

多情佛心前編　里見淳作　★★★

紅樓夢（二）　豊雪芹作　松枝茂夫譯　★★★

デイジ・ミラー　ヘンリ・デエイムア作　渡邊純譯　川田周雄譯　★

メゾン・テリエ他三篇　モーパッサン作　河盛好藏譯　★

マルサス穀物條例論　楠井隆三　東嘉生譯　★★

民俗學方法論　クローン著　關敬吾譯　★★